

---

**薔薇姫** story of the black rose

有栖川 咲

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

薔薇姫 story of the black rose

### 【Nコード】

N1711E

### 【作者名】

有栖川 咲

### 【あらすじ】

ローズゲーム  
薔薇戦争 それは美しき薔薇達の血塗られた戦い。飛び交う銃弾、舞い散る鮮血。生き残るのは誰？ “姫”と呼ばれた運命の少女達の儚く哀しい物語が今、始まる。

## 序章

ふたつの世界が交わりし時、物語が幕を開ける

導くは血塗れの騎士

誘われしは憐れな少女

穢れなき白い手は紅く染まり

人々は散りゆく薔薇に狂喜する

さあ、残酷劇が始まる

君ハモウ逃ゲラレナイ

## 第一章 ？・始まりのグランギニョル

校内に鳴り響くチャイムが退屈な授業の終わりを告げた。教室はざわめきだし、女生徒達の華やかな笑い声で満たされていく。窓からは夕日が射し込み、校内を優しい朱あかに染めた。今日も穏やかな放課後が訪れる。

「ごきげんよう」

軽く挨拶を交わし、ひとり、またひとりと女生徒達は教室を後にする。私も教科書や筆箱を鞆の中に詰め込み、帰り支度を始めた。

「アンジエ、帰る」

少し上の方から聞こえた声に顔を上げると、机の前に栗色の髪の少女が柔らかな笑みを浮かべて立っていた。琥珀色の瞳を細め、上品に微笑む姿はいつ見ても素敵だと思う。

彼女はロゼッタ・スノードロップ。愛称はロゼ。私の幼なじみであり、親友でもある。ロゼとは家が近く、その上、私達が通うこの学園は幼稚舎から大学までエスカレーター式だから彼女とは物心ついた頃からずっと一緒だ。

因みにこの学園は俗に言うお嬢様学校ってやつで、校内での挨拶は『ごきげんよう』。マナー、身だしなみに厳しく、幼稚舎に通っていた頃からマナーを叩き込まれてきた。高等部に上がった今でも週に一度、マナーについて学ぶ授業がある。

「ロゼ、ちょっと待って。すぐ準備するわ」

残りの荷物を鞆に詰め込み、椅子から立ち上がると私はロゼと共に教室を後にした。

十

夕暮れの中、たわいないお喋りを交わしながら通い慣れた道を歩く。時折吹く風が私達の髪をふわりと揺らし、赤みがかつた街には私達の声と足音だけが響いていた。

珍しい。この時間帯はいつも比較的人通りが多いのに今日は誰ともすれ違わない。明らかにいつもと違った。だけど、この時の私は不気味なほど静まり返ったこの街を不審に思わなかったの。生きるものの全てが消え失せてしまったかのようなこの街を。

歩き始めてから15分ほど経った頃、白を基調とした家と色とりどりの花々が咲く美しい庭が見えた。あれがロゼの家。幼い頃、幾度となく遊びに行った。16歳になった今でも彼女の家にはよく遊びにいつている。

家の前で私達は互いに手を振り、別れの挨拶を交わした。彼女を見送り、私は再び歩き出す。次の十字路を右に曲がり、そこから少し歩けば、私の家だ。

十字路はすぐそこ。家まで後少し。帰ったら何をしようか。そんなことを考えながら十字路を曲がった時だった。

私の瞳に妙な人影が映った。その人影はこちらに向かって来ているようで、私達の距離は徐々に縮まっていく。近づくにつれ、ぼやけていたその姿がはつきりとしてきた。

見慣れない青年だ。年は私より上だろうか。銀髪に黒縁の眼鏡。分厚い生地白いジャケットを羽織り、腰に剣を差したその姿はまるで御伽噺の騎士。こんな街中にその姿はあまりにも不釣り合いで、彼の存在だけ浮いて見える。絵本の中の方がお似合いだわ。整った顔立ちをしているのにもつたいない。よく似合ってるとは思うけど、場違いだ。

そんなことを考えながらすれ違い際にチラッと青年を見ると眼鏡の奥の銀灰色の瞳と視線がぶつかった。青年の鋭い瞳に本能的に恐怖を感じた私はすぐさま視線を外し、歩調を早めた。早く彼から離れたい。離れなくてはいけない。そんな思いが私を駆り立てる。

「……………黒薔薇の姫君、アンジェリカ＝ローゼンワール……………」

私の耳に届いた低い声。その声には私は足を止め、振り返ってしまった。振り返らずにはいられなかった。

何故って？

『アンジェリカ・ローゼンノワール』、紛れもない私の名前。前半の部分は意味がよくわからなかったけど、青年は確かに私の名を口にした。彼が知るはずのない私の名を。そして、振り返った私が目にしたのはあまりにも信じ難い光景だった。

私の頭上で鋭く光る刃。青年は冷たい目で私を見下ろし、剣を翳す。躊躇いもなく振り下ろされたそれが容赦なく私に迫り来る。

「……っ！」

私は転がるように駆け出した。剣の切っ先はスカートを捉えたが、間一髪のところでは届かなかった。

なんで？ どうして？

行き場のない思いが頭の中を駆け巡る。見ず知らずの青年に命を狙われるような心当たりなんてないのに……。

「もう……なんで追い掛けて来るのよ……！」

静まり返った街に響くふたつの足音。走りながらチラツと後ろを振り返れば、私の瞳に剣を握り、執拗に追い掛けてくる青年の姿が映る。

キラキラと光る刃が隙あらば私を切り裂こうと狙っているようで、私はすぐさま向き直り、全速力で街を駆け抜けた。

髪が乱れ、スカートが翻る。腰まで伸ばした自慢のブロンドも今は

ただ邪魔なだけ。

「……なんで……こんなに……しつ、こい……のよ……っ！」

走っても走っても青年を振り切ることができない。それどころか私と彼の距離は徐々に縮まってきた。

「もう、無理……」

どれほどの距離を走っただろうか。正確な距離などわかるはずもないが、相当な距離を走ったということは間違いない。

息が上がリ、足がもつれる。運動は得意なほうだし、体力にもそれなりに自信があるけれど、さすがにきつくなってきた。

私の走るスピードが落ちたその際に一気に距離を詰めらる。気付けば青年の手に握られた剣の切っ先がもう少しで私に届きそうなるまで追い詰められていた。

「ッ！」

近くで風を切るような音が聞こえ、遅れて左肩に鋭い痛みが走る。剣の切っ先が私の左肩を捉えたのだ。切れた衣服の隙間から覗く白い肌からは真っ赤な鮮血が止めどなく溢れ出す。

あまりの激痛で走ることができない。だけど、そんな私に容赦なく次の攻撃が襲い掛かる。

肩の痛みを堪え、私はとっさに右へ跳んだ。持ち前の反射神経のお



かげで剣が太ももを掠る程度で済んだけど、この時片方のローファ  
ーが脱げ、バランスを崩してしまい、私は身体を固いコンクリート  
に思い切り叩きつけてしまった。更なる痛みが私を襲い、目に涙が  
滲む。

痛い。だけど、このまま地面に伏せていたらきつと痛いでは済まな  
い。

痛みを堪え、必死の思いで顔を上げたその時だった。私の青い瞳に  
映った鋭い刃。顔を歪め、肩で息をする私に青年は涼しい顔で剣の  
切っ先を向ける。

どうして？ 同じ距離を走ってきたはずなのに全く呼吸が乱れてい  
ないなんて信じられない。女の私よりは体力があるかもしれないけ  
ど、いくらなんでもこれは異常じゃないかしら。

青年は表情ひとつ変えず、剣を振り上げ、それを私の頭上に翳した。  
そのまま私目掛けて剣が振り下ろされる。近付いてくる刃。だけど、  
私にはもう逃げる気力も体力も残ってはいなかった。

脳裏に紅く染まった自分の姿がよぎる。私は座り込んだまま堅く目  
を瞑り、スカート握り締めた。

キンッ

甲高い金属音が空気を震わせる。

痛みはいつまで経ってもやって来ない。私は堅く閉じていた瞳を恐る恐る開いた。

「えっ？」

目の前の光景に酷く驚いた私は大きく目を見開き、その場で固まってしまった。

いつの間にか現れたふたりの青年。彼らも銀髪の青年と同じように騎士を彷彿させるような格好をしている。ただ、彼らは白ではなく黒のジャケットを羽織っていた。

私目掛けて振り下ろされた剣は青年のひとりが身の丈ほどもある大剣で受け止め、もうひとりの青年は銃を構え、怒りの込められた瞳で銀髪の青年を見据える。

「僕らがお相手しましょう。覚悟はいいですか？」

青年は銃口を銀髪の青年に向けたまま低くドスの利いた声を響かせた。私に向けられている訳じゃないのに殺気の込められたその声にビクツと肩が跳ねる。

銀髪の青年に向けられるあからさまな殺意。それなのに彼は眉ひとつ動かさない。

「……黒薔薇、か。……分が悪いな」

銀髪の青年は感情の籠もっていない声でそう言うと甲高い金属音を響かせ、しなやかな動きで大剣を弾き、後ろへ飛び退いた。

彼がパチンと指を鳴らしたのを合図に空間に亀裂が生じる。彼は迷うことなくその亀裂に飛び込み、姿を消した。亀裂は銀髪の青年を飲み込むと何の形跡も残さずに消えてしまった。

あまりに衝撃的なその光景に私は動くことができず、時が止まってしまったかのようにただ一点を見つめる。瞬きをすることすら忘れてしまった。

「大丈夫でしたか？」

動かない私を横から誰かが覗き込む。視線をゆっくり動かすと私の瞳に先程銃を構えていた青年が映った。私に話し掛けるその声はあのドスの利いたものとは打って変わって、柔らかく優しい。

改めて彼を見ると、その顔立ちは思った以上に綺麗で驚いた。程良い長さに切りそろえられた黒髪、吸い込まれてしまいそうな漆黒の瞳。大人びた容姿で、その姿はまるで精巧に作られた人形のように。恐らく年は私よりも上だろう。先程使用していた銃は腰に収められていた。

もうひとりの青年も黒髪と漆黒の瞳の持ち主だ。彼も整った顔立ちをしているけど、彼の場合は『綺麗』より『格好いい』の方がしっくりくる。身長は彼の方が高いみただけど、年は彼の方が下に見える。あの馬鹿でかい大剣は彼の背中に背負われていた。

「あ、ありがとうございます」

「いえ、貴女が無事でよかった」

立てますか、と銃を所持した青年が手を差し出してくれた。私はその手を借りてよろよろと立ち上がる。

「姫、僕らもそろそろ行きましようか？」

「……はい？」

私が立ち上がると彼は唐突にそんなことを言い出した。それは明らかに私に向けられた言葉だったけど、全く意味がわからない。つい間抜けな声を出してしまった。

「……あの、行くつてどこに　つきゃあー！」

青年は私の言葉を見向きもせず、軽々と私を抱き上げるとパチンと指を鳴らした。先程と同じように空間が歪み、亀裂が生じる。

まさかっ……！！

嗚呼、何故嫌な予感ほど当たってしまうのだろう。

彼は私を抱えたまま迷うことなくその亀裂に飛び込んだ。

私は抵抗することもできずに彼らと共に深い闇の中へ墜ちていった。

？・黒薔薇の街

墜ちているのか、浮いているのか。

どちらが上で、どちらが下か。

深い深い黒に支配された世界。終わりの見えない闇が広がる。

なんで私がこんな目に遭わなきゃいけないの？

これから一体どうなるの？

「もう、やだあぁあ！」

非現実的なことが立て続けに起こり、私はパニックに陥っていた。

レディには有るまじき大声で叫び、青年の首に絞め上げるんじゃないかってくらい強くしがみつく。

「お、落ち着いてください！」

青年の声は少し苦しそうだけど、構うことなく更に強くしがみついた。ぐっ、と彼が小さく呻いた気がしたけど、今の私に人のことまで気にしている余裕なんてない。

こんなところに置き去りにされたらたまったものじゃないわ！  
私は青年から離れないように彼の首を絞め上げ　ううん、違った、彼の首にしがみつくに必死だった。半泣きになりながら必死に彼にしがみつく私の姿はさぞかし情けないだろう。

「ううん………帰りたい………」

「ほら、泣くなつて。もう着くからさ」

大剣を背負った青年がそう言いながら私の頭をぼんつと軽く叩いた。  
着く？ どこに？

私達を取り囲むのは依然として黒一色の世界。闇だけが佇むこの場所が一体どこに繋がっているというの？

彼が何と言おうと黒で覆われたこの空間がどこかに繋がっているだなんて考えられない。どこに着くって言うんですか、そう抗議しようとうと口を開きかけたその時だ。

闇の中に光が生まれた。その光は一瞬の内に広がり、私達は眩い光に包まれる。あまりの眩しさに私は目を開けていることが出来なかった。

「えっ!？」

再び目を開けた時、私は素っ頓狂な声を上げてしまった。目を大きく見開き、金魚のように口をパクパクと開閉する。

あの一瞬の間に何が起こったのか。私達が今いる場所は闇の中でも光の中でもなく、どこか知らない街の広場のような所だった。

綺麗だけど、どこか異様な街だ。建ち並ぶ家々は煉瓦造りで可愛らしいデザイン。統一性があり、自分勝手な建物がゴチャゴチャと並ぶ街なんかよりずっと綺麗。広場の中央には小さいけれど、繊細な装飾が施された噴水があり、そこから噴き出される水が美しい弧を描いている。

物語の一節にありそうな、そんな街のどこか異様なのかった？

それは　薔薇。誇らしげに咲く薔薇のひとつひとつはとても綺麗なのだが、その数は異常な程多く、その全てが漆黒の花を咲かせているのだ。無数に咲き乱れる黒薔薇が美しいこの街を異様ものに変えている。

空を見上げると、沈みかけていたはず太陽は高く昇り、爽やかな青がどこまでも続いていた。

な、何が起こったの!？」

常識では考えられないことばかり。驚愕と困惑が頭の中をぐるぐる回る。

「…………ど、こ…………？」

「華の国、黒薔薇の領土です」  
テリトリー

私の殆ど呟きに近かった一言に答えてくれたのは、銃を所持した青年。だけど、全く意味がわからない。ふざけているのか、からかっているのか、はたまた私の聞き間違いか。『華の国』なんてメルヘンな国名、聞いたことがない。

「あの…………、今なんて…………？」

「ここは、はなぞく華族と呼ばれる者達が暮らす華の国です。そして、今僕らがいるこの場所は黒薔薇族の領土です」

「…………頭、大丈夫ですか？」

パツと両手で口を押さえたけど、時すでに遅し。出てしまった言葉は戻らない。

思ったこと、率直に言っちゃた…………。

気付いた時には口が勝手に動いていた。まだ相手がどんな人だかよくわからない上に彼は銃を所持しているというのに…………。

怒って発砲してきたらどうしよう…………！

見た目は穏やかそうだけど、人は見掛けによらない。現に銀髪の青年に銃口を向けていた時の彼は別人かと思うほど怖かった。

「やだなあ。僕は至って正常です。ここは、そうですね…………姫から見たら異世界っていうんでしょうか？ 僕らの世界と姫の世界は遠くて近い存在なんです。まあ、詳しいことは城で説明しますよ」



自分の勝手な想像で青ざめる私に彼は穏やかに笑いかけた。どうやらいらぬ心配だったようだ。

って、ちよつと待って。

異世界って何？ 勿論『異世界』って言葉は聞いたことがある。意味だつてわかっている。でも、それは想像の世界。所詮は作り話。異世界が存在するなんて本気で言う人はきつと頭がいかれてる。異世界なんて存在しない。それが常識。それが現実。

……でも、否定しきれないのもまた事実。そう、今の私には。異世界なんてあり得ない。だけど、それ以外に今の状況を説明できるものがない。

不安、動揺、焦燥。

行き場のない思いが私を支配していく。ぐるぐる、ぐるぐる。それは終わりのない迷路のように。

「……………」

ひとりで悶々としていると突然、揺れを感じた。規則的に伝わる振動。少しずつ進んでいく景色。

「ちよつ、ストップ！ ストップ！」

「どつしました？」

きょとんとした顔をして青年は立ち止まった。それと同時に揺れも収まる。

「どうしたもこうしたもないです！」

亀裂に飛び込んだ時から私は彼にずっと抱えられたままだった。彼が進めば私も進む。揺れの原因は彼が歩き出したから。

「何者かもわからない人達とこれ以上、どこかへ行くつもりなんてありません！」

確か城で説明するとか言っていた気がする。だけど、随分物騒なもの所持した得体の知れない人達に素直にのこのこついて行く程、私も馬鹿じゃない。

「ああ、すいません。申し遅れました。僕はユノ＝アルフォード。以後お見知り置きを、アンジェリカ＝ローゼンノワール嬢」

「俺はアシル＝ランドール。よろしくな」

「いや、名乗ればいいっていう問題じゃ　って、なんで私の名前を……？」

銃を所持している青年　ユノは確かに私の名を口にした。それもフルネームで。

名乗った覚えなんてないのに……！

「あんたが黒薔薇の姫君だからだよ」

答えてくれたのはユノではなく、大剣を背負った青年　アシル。でも、全く答えになっていない。

「あの…意味がわからないんですけど……。『黒薔薇の姫君』って一体……？」

“黒薔薇の姫君”

あの時は大して気にも留めなかったけど、確か銀髪の青年もそんなことを言っていた。それなりに裕福な家庭で何不自由なく過ごしてきたけれど、私は『姫』なんて呼ばれる程高貴な身分じゃない。この国のことだって何も知らないのに、彼らは何故、私のことをそう呼ぶの？

「城で全て説明します。それと、敬語はいりませんよ」

「そうそう。敬語なんか使う必要ねえよ。あんた、姫なんだし」

「アシル、君はもう少し言葉使いに気をつけるべきです」

「えー、敬語なんて堅苦しいじゃん」

「あ、あの……」

「そういう問題じゃありません。僕や部下にまで敬語を使えとは言いませんが、少しは身分というものを考えなさい」

ふたりはああだこうだと言い合いながら歩を進めていく。私は城に行くなんて一言も言っていないのに、ユノは降ろそうとしてくれない。つまり、このままだと強制的に連れて行かれるわけで……。

「ちょっと、待って……！」

「ユノは相変わらず頭が固いなあ」

「アシルが適当過ぎるんですよ」

「無視しないでよおお！」

十

降りして、と何度かお願いしてみたけれど、『それは出来ません。姫は怪我をしておりますし、靴だって片方ないじゃないですか。姫に怪我をさせてしまったのは僕らが白薔薇に先を越されてしまったせいですから貴女を歩かせるだなんて出来ません』と、降りして貰えず、結局城までお姫様抱っこで強制連行された。

やっと降りして貰えたのは城の大扉の前。大扉には交差した2本の剣に薔薇が巻き付いたレリーフが施されていた。目の前に聳え立つ城は美しく迫力がある。ここに来るまでに通った城の庭も絵画のよ

うに美しかった。

街といい、城といい、まるで御伽噺の世界。絵本の中に迷い込んだような気分になる。

「姫、中に入りましょう」

その美しさに見とれ、ぼーっと城を見上げながらその場につっ立っている私にユノは優しく手を差し出した。私が遠慮がちに彼の手を取るとユノは私の手を引き、大扉の正面まで進む。そして、彼は扉にもう片方の手を掛けた。ギィィと音を立てながら大扉がゆっくりと開き、徐々に煌びやかな城内が姿を現す。私くらいの身分じゃお城に行く機会なんて滅多にない。意味もなく緊張してしまい、私はぎこちない動きで城内に足を踏み入れた。

「まずは傷の手当てですね」

「あと、着替えだよな。おーい、誰か！」

アシルがパンツと手を叩くと奥の方から数人の足音が聞こえた。

「お帰りになられていたのですね、ユノ様、アシル様」

奥から出てきたのは3人の女性。黒を基調としたメイド服を着ていることから言われなくてもこのメイドであることがわかる。

「ああ、今さっきな」

「？」用件は？」

「姫の手当てと着替えをお願いします」

ユノは後ろにいた私の肩に手を掛け、そっと前に押した。

「かしこまりました」

メイド達は私に優しく微笑み掛け、深々と丁寧にお辞儀をする。

「姫様、お逢いできて光栄です」

「何か御座いましたらわたくしどもに何なりとお申し付け下さい」

「あつ、えっ……と……ありがとうございます」

こんなに畏まられると逆に緊張してしまう。反応にも困る。

「いやですわ、姫様。わたくしどものようなメイドに敬語なんてお使いにならないで下さい」

そんな私の様子を見て、メイド達はクスツと笑みを零した。

「姫、後で迎えに行きますので、手当てと着替えが終わったら僕ら  
が来るまで部屋で待っていて下さい」

「……………うん」

「それでは、お部屋にご案内致します。こちらです、姫様」

私は一旦ユノ達と別れ、メイド達と一緒に部屋へ向かった。

この時はまだ知らなかったの。私を待ち構えているものがあまりにも残酷な運命だということ。

？・宿命の姫君

右へ左へ。

どこまでも続く廊下はまるで迷路。城内は思った以上に広く、今私  
がいるこの部屋に辿り着くまで結構時間がかかった。

通された部屋はやけに広く、無駄に豪華。立派過ぎるその部屋はま  
るで王族の部屋。……と言っても王族の部屋なんて見たことがない  
から私の勝手なイメージでしかないのだけれど。

部屋に入ると私はすぐに椅子に座らされ、メイド達の手当てを受け  
た。丁寧に巻かれた包帯の下には痛々しい傷跡がしっかりと刻まれ  
ている。

手当てを終えた今、このただっ広い部屋にいるのは私ひとり。メイ  
ド達は手当てを終えると私に着替えのドレスを渡し、部屋を後にし  
た。

私は渡されたドレスを広げ、かれこれ10分ほどそれと睨めっこを  
している。何故私がそんなことをしているのか。その原因はこのド  
レスのデザインにある。

黒を基調としたそのドレスはフリル、レース、リボンが多用され、  
色こそ落ち着いているもののデザインはかなり少女趣味なものだっ  
た。ドレスの他に黒のブーツとこれまたレースたつぷりのヘッドド  
レスも渡されている。

可愛い。とても可愛いのだけれど、それ以上に恥ずかしい。正直、



あまり着たいとは思えない。だからといって、着替えない訳にもいかないだろう。切り裂かれたスカート、血と汗にまみれたワイシャツ。今の私の格好はあまりにも悲惨過ぎる。

どうしよう……。。

着替えればいいだけの話だ。別に悩む程のことではない。だけど……やっぱり抵抗がある。

いつまでも迷っていると不意に誰かがドアをノックした。コンコンと小気味の良い音が響く。

「終わりましたか？」

ドア越しからユノの声が聞こえた。

「姫え、開けてもいいかー？」

「わああ！ ちょっと待ってー！」

どうやらアシルもいるらしい。後で迎えに来ると言われていたことをすっかり忘れていた。

「ゆっくりでいいですよ。ここで待ってるんで、終わったら声を掛けて下さい」

「……はい」

これはもう着替えるしかないよね……？

しょうがない。私はボロボロの制服を脱ぎ、渋々ドレスに着替え始めた。

数分後、着替え終わり、ドアを開けると暇そうにしているふたりの姿が目に入った。ユノは壁に凭れ掛かり、アシルは廊下であぐらをかいている。

「ごめんなさい。待たせちゃって」

「構いませんよ。そのドレスよく似合ってます」

ユノは柔らかい笑みを浮かべ、少し曲がっていたリボンを直してくれた。

待たせたにもかかわらず、優しく微笑みながら私のことを褒めてくれるユノは紳士だと思う。

「……………ありがとう」

私は彼の言葉に苦笑いを浮かべ、お礼の言葉を返した。

おかしいと思うでしょ？ たとえお世辞だとしてもせつかく褒めてくれたのに苦笑いだなんて。こういう時はにっこりと微笑むもの。だけど、この時の私からは苦笑いしか出て来なかったの。

「……………お気に召しませんでしたか？」

そんな私の表情を見て、ユノは勘違いしたらしい。確かに気に入ったとは言い難いけど、そんな理由で笑顔が作れないほど私は子供じ

やない。

「ううん、違うの。そうじゃなくて……」

服に負けている。鏡に映る自分の姿を見てそう思った。これが苦笑いの理由。褒められても何だか悲しくなってくる。きっとユノのことだから私が何と言おうと『似合ってます』と言ってくれるのだから。だから余計にそう感じるのだ。

「私にはこのドレスは可愛い過ぎるわ」

「そんなことねえよ。似合ってると思うぜ」

「……え？」

意外。アシルがこんなことを言うとは思わなかった。彼は気を使うようなタイプには見えない。だから、アシルの口からそんな言葉が出てきたことに正直驚いた。

「だけど、やけにフリフリしてるよな。フリル多すぎじゃねえ？」

「誰の趣味？ あっ！もしかしてユノ？」

「違います。敢えて言うなら仕立て屋の趣味です」

「あー、あのオッサンか」

「姫のドレスですからいつも以上に張り切っていましたしね。まあ、仕立て屋のことはどうでもいいんです。姫、僕の部屋で全て話します。あまり時間がありません。行きましよう」

十

「どつぞ」

「ありがとう」

部屋に入るとユノはスツと椅子を引いて、私を座らせてくれた。

彼の部屋は私が最初に通された部屋程広くはなかった。と言っても一般的な部屋と比べたら充分過ぎるほど広い。落ち着いた雰囲気よく整理された部屋だ。

全員が席に着くとユノが真剣な表情でゆっくりと口を開いた。

「姫、単刀直入に言います」

ユノは真つ直ぐに私の瞳を見つめる。私の青い瞳に映る彼はあまりにも真剣で目を逸らすことができない。どくと心臓が脈打つ。彼が次に発する言葉は全く想像ができない。聞くのが怖い。急にそう感じたのはきつとこの重々しい沈黙のせい。

「……………貴女には薔薇戦争ローズゲームに参加して頂きます」

「……………ろーず、げーむ……………？」

何を言われるのかと思いきや、『ゲーム』って……………。なんだか拍子抜けしてしまう。

「簡単に言えば権力争いだよ。互いの姫を殺し合うんだ。武器は何を使おうが自由。どんな手を使っても構わない。最後まで姫が生き残った一族の勝ち。単純だろ？」

「……………えっ」

ほっとしたのもつかの間、アシルの言葉に全身の血の気が引いた。殺し合い。平和な毎日を過ごしてきた私には無縁の言葉。だけど、アシルが冗談を言っているようには見えない。

「……………うそっ……………」

一瞬にして私は絶望という名の谷底に突き落とされる。

「な、なんで私がッ……………！ どういうことなのよ、ねえー！」

「姫、落ち着いて下さい」

身を乗り出し、彼らに迫る。殺し合いのゲームに参加しろなどと言われて落ち着いてなどいられようか。

「すみません。いきなりこんなことを言われたら驚きますよね……。取り敢えず座って下さい。ちゃんと話しますから」

ユノに宥められても私は一向に座ろうとしなかった。ユノはそんな私の肩にそつと手を置き、軽く押し返す。そんなに強い力で押された訳じゃないけど、バランスを崩した私はすとんと椅子の上に逆戻りした。

「少し長くなると思いますが、我慢して下さいね」

+  
∴ + + ∴  
+

もう既に話したことですが、ここは姫の世界とは全く別の世界。姫から見ると異世界ということになりますね。と言っても華の国と人間界に全く繋がらないという訳ではないんです。『狭間の世界』と呼ばれる場所によってふたつの世界は僅かですが繋がっています。

あの暗闇がそうなのかって？ いえ、あれは只の通り道です。姫と僕らが出逢ったあの街が狭間の世界と呼ばれる場所です。

姫が幼い頃から住んでいる街とよく似ていたかもしれませんが、あの場所こそが狭間の世界なんです。狭間の世界は、はつきりとした形を持たないんですよ。常に変化し続ける場所なんです。あの街にいたのは僕らと姫、そして白薔薇。他に人影はなかったでしょう？

これが何よりの証拠です。あの時、狭間の世界が姫の住んでいる街の姿をしていたのは、姫が無意識の内に迷い込んだためでしょう。

そして、狭間の世界を通って華の国と人間界を行き来することができるのは、薔薇族だけなんです。ここまではわかりましたか？

それではそろそろ本題に入りましょうか。ローズゲームとは何か、なぜ貴女が参加しなくてはいけないのか、お話します。

華の国には百合族、桜族など様々な種族の者達が暮らしています。そして、この華の国を治めているのが僕ら、薔薇族です。

薔薇族は紅、青、黄、白、黒の5つの一族に分かれています。各一族の中から有力者をひとりずつ出し合い、その選ばれた5人の有力者を中心に政治を行ってきました。わかりづらいですか？ 簡単に言えば王様が5人いるようなものです。

これから少し昔話をしますね。えっ？ 唐突じゃないかって？ 細かいことは気にしないで下さい。

王が5人もいれば、意見が食い違ふことも当然あると思いますよね？ 意見の食い違いがやがて争いに発展し、ついには薔薇族内で内戦が起こってしまいました。

争いが静まる気配は全く感じられず、内戦は激しくなる一方。国民は動揺し、国の均衡は瞬く間に崩れていきました。

そんな絶望的な状況の中、争いを鎮めようと立ち上がった方々がいらっしやっいました。

その方々が先代の薔薇族の姫君方。紅、青、黄、白、黒の5人の姫君は手を取り合い、懸命に説得を続けました。しかし、誰ひとりとして彼女達の言葉に耳を傾けようとした者はいなかったのです。

嘆き悲しんだ姫君は狭間の世界を通り、人間界に姿を消してしまいました。

必死の搜索が行われましたが、姫君は誰ひとりとして見つかることはありませんでした。

そして、最悪なことに姫がいなくなってしまったのはお前のせいだと争いは更に激しさを増してしまっただんです。

このままでは国が壊滅してしまう。そこで提案されたのがローズゲーム。姫君の生まれ変わりの少女をこちらに招き、殺し合い、最後まで生き残った一族に最高権力を与える。

有力者達は姫君の生まれ変わりが誕生するまで休戦とすると、そして、姫君の生まれ変わりが揃った時、この戦いに終止符を打つと、宣言しました。



+  
… + + + …  
+

「時代は巡り、ついにその日を迎えてしまった訳です」

「……私が……その生まれ変わりなの……?」

私の声は自分が思った以上に震えていた。

「……ねえ、何かの間違いでしょ……? 間違いだよね……?」

これが間違いだとしたらどれほど救われただろうか。だけど、現実  
はそんなに甘くない。私の淡い期待なんてすぐに砕け散ってしまう。

「先程も話しましたが、狭間の世界を通ることができるのは薔薇族  
のみ。普通、人間は華の国に来ることはできないんです。姫でな  
ければ貴女は今、ここにいますはずがありません」

あまりのショックに私は危うく椅子からずり落ちそうになった。  
彼らの話からすれば私以外に姫は後4人。その中で生き残れるのは  
たったひとり。16年で人生の幕を閉じるなんて、そんなの絶対に  
嫌!

「そんなんっ! こんなの身勝手過ぎるわ! 内戦って昔の話なんで  
しょう!? 決着がついていない状態でも今までやって来れたんで  
しょうっ!? ……貴方達だって、直接関係がある訳じゃないんで  
しょう……? どう、して……」

勢い良くまくし立てるも声はどんどん小さくなり、語尾は殆ど消えかけていた。

「大丈夫だって！ 俺らがしっかり守ってやるから」

今にも泣きそうな私を励ますかのようにアシルが私の肩に触れた。服を通してじわりと彼の熱が伝わる。

「……アシル」

「そんな顔すんなって」

そう言いながらアシルはくしゃっと私の頭を撫でた。撫で方がちよつと乱暴だけど、これはきつと彼なりの優しさ。

「僕らが命を懸けても守り抜いてみせます。大丈夫ですよ、姫」

他の誰かを犠牲にしてまでも生き抜くか、自ら破滅の道を選ぶか。  
あなたならどちらを選びますか？

歯車は大きく狂い始めた。いや、初めから歪んでいたのかもしれない。  
い。

さあ、ゲームを始めよう。悪夢という名のゲームを。

？・幕開けのナイトメア

ゲームには必ずルールがあります。

貴女が参加することもルール。

途中でやめてはいけないこともルール。

ルールは守らなくちゃいけないものですよね？

賢い貴女ならもうおわかりでしょう？

どんなに足掻こうと逃げることなどできはしないのです。

+  
:  
+ + +  
:

目の前に大きな地図が広げられる。ユノは私が落ち着いてきた頃を見計らい、ローズゲームのルールについて話し始めた。

「ここが黒薔薇の領土、今僕らがいる場所ですね。これらが他の薔薇族の領土、この辺り一帯が他の種族の領土。そして、ここがローズゲームの行われる場所です」

ユノの長い指は地図の上を滑るように移動し、最後にこの地図に描かれているものの中で最も広い場所を指差した。

「ここは華の国で最も広い森で、唯一誰の領土でもありません。今日の日没までにここに移動し、ゲーム中はこの森から出ることは許されません」

「日没が始まりの合図ってこと？」

「いや、ゲームはもう始まってるぜ。姫、あいつに殺されかけただろ？ 俺らが姫を見つけ出してこっちに連れてくるのもゲームの内なんだ。その途中で先に他のところのお姫様を見つけたら殺やっちゃても構わないんだよ」

アシルは恐ろしいことをさりと口にした。

“あいつ”とはあの銀髪の青年のことだろう。冷たい銀灰色の瞳、鋭く光る剣（剣）。ユノとアシルが来るのが後少しでも遅かったら 想

像しただけでもぞつとする。

「殺っちゃても構わないって……。そんなの酷過ぎるわ。こっちは何も知らないのに問答無用で殺されるってことでしょう？」

あの時、私はまだローズゲームのことなんて知らなかった。殺す前にわざわざ説明する人なんていないだろうし、仮に説明されたとしても納得なんてできる訳がない。

「まあ、そういうことになるな。でも、ルールだし」

「ルールって……」

私はかなり危険な目に遭ったのだ。それを『ルール』の一言で片付けられてはたまったものではない。

「なんだよ、姫。あれくらいでビビってんのか？ そんなんじゃこの先、身が持たねえぞ？」

「あれくらい」じゃないわよ……」

もう少しで私の人生に幕が下りるところだったのだ。普通の女子高生である私にとって“あれくらい”で済まされるレベルではない。大事件だ。

「アシル、何でもかんでも自分を基準にして考えるのはよくないですよ。それに姫があんな危険な目に遭ったのは僕らのせいなんですから、少しは反省というものをですね……」

「まあ、いいじゃん。無事だったんだしさあ。結果オーライってや

っ?」

「姫に怪我をさせておいてどうしてそんなことが言えるんですか?」

「えっ? 生きてんだから何も問題ないだろ?」

「アシルの場合は死ななければ問題ないかもしれませんが、姫は君とは違うんですよ?」

「ユノは相変わらず細かいなあ。細かいことは気にすんなって。はい、この話は終わりっ! ほら、時間ないんだろ? 次行こうぜ、次」

強引に話を終わらせるアシルに対し、ユノは盛大な溜息をつく。

「アシル、君は……………もういいです」

ユノは苦々しさの中に諦めや呆れが入り混じったような何とも言えない表情を浮かべ、もう一度溜息をついた。あからさまに嫌な顔。だけど、それを向けられている当の本人はどこ吹く風。わざと気付いていないふりをしているのか、ただ気にしていないだけなのか、アシルの場合おそらく後者であろう。

「……………では、次は参加者の話をします」

ユノは軽く咳払いをし、再び口を開いた。

「察しはついているかもしれませんが、各一族、姫、正確に言えば先代の姫の生まれ変わりと代表の騎士ふたり、計15人が参加します。勿論、黒薔薇族の代表騎士は僕とアシルです」

「まあ、15人参加するっていつても肝心なのは5人だけだけどな」

「……アシル、それってどういうこと？」

「ん？ ほら、姫が生き残ったところが勝ちって言っただろ？ 例えば、騎士がふたりとも殺られても最後まで姫が生き残れば勝ちだし、逆に騎士がふたりとも生き残っていても姫が殺られちゃったら負けなんだよ。だから、重要なのは5人の姫だけ」

「僕らはゲームを進めるためだけの存在と言っても過言ではないんですよ。姫の生まれ変わりである方々は全員、普通の女の子ですから、殺し合えと言われても無理でしょう。だから、僕らが殺し、僕らが護るんです」

「そういうこと。俺らは使い捨ての駒みたいなもんなんだよ。ゲームにはよくあるよな」

「使い捨て……」

『使い捨ての駒』。

アシルの言葉に胸の奥がズキリと痛む。

何故そんなことを言うの？

ユノはアシルの言葉を否定してはくれない。

貴方も自分のことを使い捨てだと思っているの？

彼らはまだ逢って数時間の他人。ふたりが自分のことをどう思っているのと私には関係ない。だけど……ねえ、哀しみが私を掴んで離さないのは何故？



アシルを憐れんでいるの？ ユノを蔑んでいるの？

違う。そんなんじゃない。

わからない。わからないけど、その言葉を哀しく感じたのは事実。アシルが自嘲気味にそう言った訳でもないのにどうしてこんなにも哀しく感じるの？

彼は当然のことを話すかのようにそう言った。まだアシルのことをよく知らない私にも彼にとってそのことは当たり前のことなのだと理解するのにそれほど時間は必要なかった。

もしかしたらアシルが当然のように話したから余計にそう感じたのかもかもしれない。自嘲気味に言われた方がそれほど気にならなかった可能性は充分にある。

価値観の違い。そう言ってしまえば話は早いかもしれない。だけど……いや、もう考えるのはやめよう。どんなに考えたって私の中に答えなんてありはしないんだ。

「ねえ、ユノ、他にルールは？」

気にする必要なんてない。私には関係ないことだから。そう自分に言い聞かす。

すっきりしない気持ちを紛らわすために私はユノに話の続きを促した。

「ルールは以上です」

「え？」

いやいや、いくらなんでも少な過ぎでしょう？

「本当にこれだけなの？」

「アシルも言っていましたよ、ローズゲームは基本、なんでもありませんよ。ルールと言えるものは場所と参加者のことくらいですね」

「なんてアバウトな……。命懸けの権力争いなんですよ。こんなに適当でいいの？」

「権力争いだからこそルールがアバウトなんですよ。ルールがあったところで誰が守ると思いますか？」

「ルールなんか守っていたらすぐに殺されちゃうからな」

「……そっか」

改めて考えてみたら確かにそうかもしれない。何としても権力を手に入れるためにルールなんて守っていられないんだ。だから、細かいルールなんてあっても意味がない。最低限のルールがあれば充分。嗚呼、なんて醜いのかしら。

「あつ、姫、ひとつ言い忘れていました。ジャン＝カルヴァートには気を付けて下さい」

「……ジャン＝カルヴァート？」

「狭間の世界にいた銀髪の男です」

「……ああ、あの」

「ジャンは白薔薇族の代表騎士のひとりで、参加者の中で最も危険だと言われています。残酷無慈悲、実力もあります。そして何より、冷酷なまでの冷静さが彼の最大の強みです」

私、そんな人から逃げ切ったんだ……！

途中で助けてもらったから逃げ切ったと言えるかどうかわからないけれど、とにかく今自分が生きていることにびっくりだ。

「なあ、ユノ、そろそろ城出ねえと時間ヤバくねえか？」

不意にアシルが時計を指差しながら言葉とは裏腹に全く焦りのない口調でそう言った。

「あっ、そうですね」

ユノはスツと立ち上がる。出発するのかと思いきや彼が向かったのはドアではなく机。机の引き出しから何かを取り出し、ユノはこちらに戻ってきた。

「姫、これを」

手にはしりとした重み。渡されたのは拳銃。

「ちよっ、ま、待って！ 私こんなもの使えないわ！」

「大丈夫ですよ。リボルバーは機構が単純なので弾が詰まりにくいですし、操作も簡単で安全性も高いですから」

「で、でも……」

生まれてこのかた銃なんて使ったことがない。使うどころか触るのだってこれが初めてだ。

『リボルバー』なんて言われてもわからない。言葉くらいは聞いたことがあるけど、詳しいことはさっぱり。

「姫、ローズゲームに丸腰で挑むつもりですか？ 危険過ぎます」

「そうだけ、姫。ひとつくらいは武器を持つとかないと。いろんな武器を持った奴らがうろついているんだぜ？ 使用する武器は自由だからな。剣、銃、槍、斧、あとは……あつ、爆弾を使う奴もいるな」

確かにそんな中に丸腰で飛び込むのは危険だと思う。だけど、使ったこともない銃を使うことだって充分危険じゃないかしら？

それに爆弾なんて投げ込まれたらもう終わりじゃない。銃ひとつでどうにかできるレベルじゃないわ。

「僕らが全力で護りますが、もしものことがあるかもしれません。弾は8発、装填はしてあります。護身用として持っていて下さい」

「姫、これも持っておけよ」

ユノは押し付けるように私に銃を渡し、アシルはポケットから小さなナイフを取り出し、投げつけるようにしてそれを私に渡す。カバーが付いているとは言え、いきなり飛んできたナイフにヒヤリとしました。

こんなもの持ちたくないけど……受け取り拒否はできそうにない。  
私はそれらを受け取り、渋々ポケットにしまった。

「それでは、行きましょう」

ユノは私に優しく手を差し出す。

「……うん」

大きな不安を抱えながらも私は彼の手を取った。

私の歩む道は深い闇に包まれ、その先を見ることはできない。この  
道の先にあるのは希望？ 絶望？ それとも。

## 第二章 ? ・黄薔薇の襲撃

日は完全に沈み、辺りは漆黒の闇に包まれた。仄かな月光は無数の木々に遮られ、鬱蒼と茂る森を歩く私達を照らしてはくれない。

絶え間なく吹く風に木の葉が揺れる。木々のざわめきはまるで不吉の前兆のようで、私にはとても不気味なものに思えた。

「大丈夫ですか？」

「うん」

一歩ずつ確かめるように進んでいく。暗闇に支配された夜の森。視界が悪く、少しでも油断したら転んでしまいそうだった。

「姫、取り合えず使えそうな家が見つかるまで頑張ってください」

「……家？　ここって人が住んでいるの？」

「住んでいた、と言った方が正しいですね。昔、ここは特別な場所で様々な種族が共に暮らしていたそうです。今は誰も住んでいませんけどね」

「……何かあったの？」

「内戦が始まって皆逃げちまったんだってさ。ここって薔薇族の領土に囲まれてるからさあ。ほら、地図で見ただろ？　薔薇族が内戦してたらそりゃこつなるよ。姫だって周りが内戦してるような所に

住みたくないだろ？」

「……うん、絶対嫌」

「まあ、そういう訳でこの森には廃屋が至る所にあるんですよ。そのどれかを拠点にして動こうと　伏せて!!」

パアアンツ

ユノが声を張り上げたすぐ後に銃声が響いた。アシルに後ろから思いつ切り押されたのはそれとほぼ同時。

「きゃあっ!!」

突然過ぎて身体が反応できず、私は奇声を上げながら無様に地面へ向かってダイブした。

は、鼻が……っ!

容赦なく叩きつけられた私の鼻が悲鳴を上げる。うっ………痛過ぎるよ……。

「あーあ、外れちゃったかあ」

聞き覚えのない少年の声が耳に届く。起き上がり、声の聞こえた方を見やるとそこにはひとりの少女とふたりの少年が立っていた。

淡い黄色のドレスを纏ったその少女は私と殆ど年は変わらないように見える。風に靡く長い髪は明るい茶色。紫水晶アメジストのような瞳は不安げに揺れている。

夜間に映える金髪とシャンパンゴールドの瞳。くすんだ黄色のジャケットを羽織ったふたりの少年はとにかくよく似ていた。顔も背丈もそっくり。同じと言っても過言ではない。唯一の違いは髪型。ひとは短髪。もうひとは肩まで伸びた金髪を後ろでひとまとめに束ねている。髪型まで同じにされたら絶対に見分けが付かないと思う。

彼らは絶対に双子だ。彼らを初めて見た私にもそう断言できる。同じ人がふたりいるのかと錯覚してしまいそうなほどそっくりなのだ。双子じゃないなんて言わせない。

ふと思っただけで、騎士達の服のデザインは国で統一されているのかしら？

彼らの服はユノやアシル、そして、銀髪の青年　ジャンのものとよく似ていた。色は違えどデザインはたぶん同じ。まあ、そのほうがわかりやすいよね。一目で騎士だってわかるもの。ユノとアシルは黒、ジャンは白。色で区別されているのだとしたら彼らは黄薔薇？

って、香気にそんなこと考えている場合じゃないわよ、私！

目の前にいるのは黒薔薇族と敵対している人物。私にとっての脅威。この森にいるのはゲームの参加者だけだもの。ユノとアシル以外は全員、敵。油断をすれば命はない。私が参加させられているのはそういう争い《ゲーム》。

余計な考えごとなんてしていたら私なんてすぐに殺されてしまうだろう。現につい先程、銃声が聞こえたじゃないか。何が起きたのか



よくわからなかったけど、もしアシルが思いつ切り押ししてくれなかったら今頃、鼻が痛いでは済まなかったかもしれない。

黒薔薇と黄薔薇。両者は相手の様子を窺うかのように無言で睨み合いを続ける。緊迫した空気の中、ふいにその沈黙は破られた。

「見るよ、セオ。黒薔薇のお姫様、もう怪我しているよ」

短髪の少年はニヤリと口角を吊り上げ、わざとこちらにも聞こえるようにそう言った。

「本当だね、テオ。なんて情けない騎士なんだろうね」

髪を結んだ少年がそれに応える。彼も同じようにニヤリと口角を吊り上げ、わざと私達にも聞こえるような声でそう言った。

挑発するような声も意地の悪い笑みも、そして、名前までそっくり。短髪がテオ、髪を結んでいるのがセオ。ああ、ややこしいなあ、もうっ！

「……相変わらず生意気な双子ツインズだな」

アシルは顔をしかめる。それはもう嫌そうに。苦虫を噛み潰したような顔とはまさにこのことだろう。

「生意気？ 事実を述べたまでさ。なあ、セオ？」

「そうだね、テオ。バカだね、アイツは」

「んだと、ガキ共ッ！」

「ガキ？ アシルにそんなこと言われたくないよ。なあ、セオ？」

「年は僕らより上でも脳内レベルは僕らより下なんじゃないかな。なあ、テオ？」

「きつと猿並みだよ」

「いや、テオ、猿が可哀想だよ。猿以下さ」

「そつか。そうだね、セオ」

「そうだよ、テオ」

「テメエら……ッ！」

アシルの額には青筋。肩は怒りで震えている。アシルの手は背中の大剣に伸び、柄を握った。双子が後一言でも挑発するような発言をしたら剣を抜いて飛びかかりそうだ。

そんなアシルの様子を見て、双子はニヤリと笑う。

「やるの？ お馬鹿さん」「」

「ああ！ もう我慢ならねえ！」

綺麗にハモったその一言でついにアシルがキレた。大剣を引き抜き、双子に切りかかろうと

「待って下さい！」

したけど、それはユノによって阻まれた。

「なんで止めんだよ、ユノッ!!」

「頭に血が上った状態で戦って、隙を狙われたらどうするんですか？ 姫にもしものことがあってからでは遅いんですよ?」

「だつてよオッ！」

「それに利き腕がそんな状態で満足に戦えるんですか?」

「あ? これくらい大したこと……」

「あるわよッ! 大したことあるわ! ち、血が出てるじゃないッ!」

アシルの右腕には痛々しい傷。暗闇のせいでユノがそう言うまで気付かなかった。きつとさっきの銃弾から私を庇った時だ。

「今回は僕に任せて下さい。まだゲームは始まったばかりですよ? 無理にやり合って何になるんですか?」

「うっ………わかったよ」

「ではアシル、姫をお願いしますね」

「……ああ」

アシルは庇うように私の前に立った。

「姫、俺から離れんなよ」

「う、うん」

アシルの背中が大きく、彼が前に立つと何も見えない。アシルの背中から少しだけ顔を出し周りを見るとすでにユノの手には銃が握られていた。

「どちらが相手をしますか、ツインズ？ それともふたりで掛かってきますか？」

ユノの声色が変わった。場の空気も一気に重みが増し、緊張が走る。

「なめられたものだね、セオ」

「まったくだね、テオ。アイツの余裕そうな態度ム力つくなあ」

「ほんとム力つくね。それに僕らはふたり掛かりで向かって行くほど弱くもないし、バカでもないさ」

「僕らが姫から離れたら絶対に姫を狙ってくるもんね。それくらいわかってるさ。そう簡単に姫は殺らせないよ？ なあ、テオ？」

「勿論さ」

「フフ、そうですか。では、どちらが先に地獄を見ます？」

ユノは笑みを湛えたまま双子に問う。だけど、目は笑っていない。張り付けたようなその笑みはあの穏やかな笑みとは全くの別物だった。

「なあ、セオ？」

「わかってるよ、テオ。やりたいんだろ？」

「流石だね、セオ。姫をお願いね」

「任せといて、テオ」

「僕が相手をしてあげるよ、ユノ。地獄を見るのはどっちかな？」

短髪の少年　テオは銃を構える。

張り詰めた空気。呼吸をすることすら躊躇われるように思えた。

「怖いかな？」

「……え」

無意識の内に私はアシルのジャケットを握り締めていた。小刻みに震えるその腕は何とも情けない。

「こ、怖くないって言ったら……嘘になるわ……」

「ははっ、大丈夫だって。ユノは俺なんかよりずっと強えからさ」

アシルが私の不安を取り除こうとしてくれているのは十分に伝わってくる。だけど、今の私の不安や恐怖はどんな言葉でも拭い去ることはできない気がした。

銃を構え、彼らは相手の様子を窺う。どちらが先に動くのか、どちらがこの戦いを征するのか、私にそれらを知る術などない。今わかるのはもうすぐ銃撃戦が始まるということだけ……。

パンッ

先に動いたのはテオだった。耳をつんざくような銃声が空気を震わせる。

ユノはその一撃を軽々と避け、右手に握られた銃を唸らせた。

暗闇の中、両者は躊躇うことなく引き金を引く。飛び交う銃弾。絶え間ない銃声。鉛の雨は止むことがない。

私にできるのはアシルの後ろからただ彼らの様子を見守ることだけ。いや、それすらも危ういかもしれない。だってそうでしょう？ 目の前の銃撃戦を平然と見ていられる方が異常だわ。私は軍人じゃない。どこにでもいる普通の女子高生なもの。

私はアシルのジャケットを強く強く握り締めた。何かに捕まっていないと立っていられそうになかったから。

「姫、大丈夫か？」

「……うん……たぶん」

「そんな心配すんな　うわあッ！」

「きゃあッ！」

突然飛んできた銃弾。アシルはすかさず反応し、大剣でそれを弾いた。

流れ弾？　いや、それにしてはまるで狙ったかのようにだった。その銃弾はアシルの背中から少しだけ顔を出していた私の目の前に飛んできたんだもの。アシルが防いでくれなかったら今頃私の頭に風穴が開いていたかもしれない。

「……あつぶねえなあ」

「……今のつて流れ弾じゃ　きゃんッ！」

もう一発。それもまた私の目の前に。

「……ない、よね……」

「ああ。アイツだよ」

アシルの目線の先を辿るとそこには少女を後ろに庇いながらこちらに銃口を向ける少年の姿が。

ユノとテオの銃撃戦に気を取られ、双子の片割れであるセオの存在をすっかり忘れていた。そう、敵はひとりではないのだ。

「姫ッ！ 頭引っ込めてろ！ 絶対、俺から離れんなよ！」

「う、うんっ」

パンッ

セオは私達に銃口を向け、容赦なく引き金を引く。しかし、放たれた銃弾はアシルの見事なまでの剣捌きで全て弾かれた。怪我をしているというのにアシルの手元は少しも狂うことがない。

「……ちくしょう、これじゃ切りがねえ」

防御は完璧。だけど、こちらには攻撃の術がない。剣と銃、遠距離戦ではやはり銃の方が有利だ。

「ねえ、銃は？ ユノから渡されたのだったら私持つてるわ。銃を使えば……」

一方的に攻撃を受けている今の状況が変わるかもしれない。アシルの剣捌きを見れば武器に関して全くの素人である私にも彼が相当な腕前の持ち主だということはよくわかる。だけど、相手に近付けなければ意味がない。

アシルひとりなら銃弾を防ぎながら距離を詰められるかもしれないけど、今は私がいる。そのせいでアシルはこの場を離れられない。傷を負ったその腕で身の丈ほどもある大剣を振るい続けるのは限界があるはず。今は完璧な防御でも崩れるのはきつと時間の問題だろ



う。アシルが銃をどの程度使えるのか知らないけど、ここは銃に切り替えた方が……。

「俺、銃使えねえんだよ」

「うそっ……」

「俺が銃なんか使ったらどこに弾が飛んでくかわかんねえもん。下手したらユノに当たるかも」

うわあ、予想外だわ……。

てつきり銃も使えるものだと思い込んでいた。銃を使ったら今の状況がきつと変わる。……更に最悪なものに。

「でも、このままじゃ……」

「わあッ!?!」

私の弱々しい声にセオの驚いたような声が重なった。それと同時に銃弾がピタリと止む。

何事かと思い、アシルの背中から恐る恐る顔を出すとセオの手に握られていたはずの銃が消えていた。

「セオ! 大丈夫か!?!」

「余所見なんてしていいんですか、テオ?」

ユノから一瞬目を離れたテオの腕から鮮血が迸る。

何が起こったの?

状況がいまいち把握できず、私は茫然と辺りを見渡した。悔しそうな表情を浮かべる双子。余裕の笑みを湛えるユノ。そして、なぜかユノに向かってサンキュー、と手を振るアシル。

「……ねえ、何が」

「テオ！ 誰かこっちへ向かって来る！ 厄介だから一旦退こう！」  
起こったの、と続くはずだった私の言葉はセオの声で遮られてしまった。

「わかったよ、セオ。ユノッ！！ 次に会った時はギッタギタのボッコボコにしてやるからな！！」

テオはベツと舌を出し、捨て台詞を吐くと茶髪の少女を連れてセオと共に闇の奥へと姿を消してしまった。

「負け犬の遠吠えだな」

うん、アシルに同感だわ。何が何だかよくわからなかったけど、さっきの時点では私達、黒薔薇族の方が優勢に見えたもの。私からしたら彼らは逃げたようにしか見えなかった。

ユノもアシルも彼らを追おうとしないけど逃がしちゃってよかったのかしら？ それとも私がいるから下手に追うこともできないとか？

私としては、いつまでも目の前で繰り広げられる銃撃戦を見ていたくなんてないし、そのまま追わないでくれた方が有り難いのだけ。

「姫、怪我はありませんでしたか？」

銃を収め、ユノは私達のもとへ歩み寄る。声色も笑顔も既にあの穏やかで優しいものに戻っていた。

やっぱり別人みたい。一瞬の内にあんなに変わるなんてある意味凄いなと思う。実は二重人格だったりしてね。ほら、何かの拍子にもうひとつの人格が……って、流石にそれはないか。

「うん、大丈夫。アシルのお蔭で無傷だわ。ユノは？」

「大丈夫ですよ。かすり傷ひとつありません」

そう言っただけ微笑んだユノは本当にかすり傷ひとつ負ってはいなかった。凄い。この一言しか出て来ない。だって、あんなに激しい銃撃戦だったんだもの。無事で何よりだけど、まさか無傷だとは思わなかったから安心したのと同じにかなり驚いた。

「アシルも大丈夫でしたか？」

「おう。ユノがアイルの銃を弾き飛ばしてくれたお蔭で助かったよ」

「ユノが銃を弾き飛ばした……？」

「ん？ ああ、そうか。姫は俺の後ろにいたから見てなかったんだね。あの時、ユノがセオの銃目掛けて一発撃ってくれたんだよ」

なるほど。あの時何が起こったのか、やっと理解できた。それにしても凄い。だって、テオと撃ち合っている合間にセオの銃を撃ち落としたってことでしょうか？ それで無傷って……超人だわ……。

「ユノって凄いのね……」

「銃の腕に關しちやユノの右に出る奴はいないと思つぜ」

「アシル、大袈裟に言い過ぎですよ。そんな大したことありません  
つて」

「いやいや、大袈裟じゃねえつて。ユノの實力は本物だよ。それに  
比べて俺なんかまだまだ……」

「アシルも實力は充分にあると思つんですが……」

そこまで言つとユノは何ともいえない表情を浮かべ、言葉を切つた。

「……アシルつて感情的になりやすいんじゃない？」

私が率直に思つたことを口にするとうノは小さく溜め息をつき、

「はい、姫の言つ通りなんですよ……」

私の言葉を肯定した。

「そんなことッ……あるかもしれない……」

「……やっぱり」

先程の一戦を見ていればよくわかる。ユノが終始冷静だつたのに対し、アシルは双子の挑発に乗せられていた。ユノがあの時止めなければ飛びかかっていたんじゃないかしら。きっとここがユノとアシルの差なのだろう。

「姫、僕らもそろそろこの場を離れましょう」

ユノは辺りを軽く見回し、唐突にそう言った。

「まだ近くにはいないようですが、他の薔薇族がこちらへ向かっている可能性が高いです。この暗闇の中で奇襲をかけられては厄介ですから」

「えっ……？ う、うん」

なんでそう言い切れるの？

その理由はわからないけど、どちらにせよここにいつまでも留まっている訳にもいかない。取り敢えず私はユノの言葉に従った。

そういえばあの双子もそんなことを言っていた気がする。でも、あれは逃げるための口実よね？

頭に疑問符を浮かべながら歩いているとふいにユノが私の顔を覗き込んだ。

「どうしました？」

「えっ……？ あっ、いや大したことじゃないんだけど……。なんで他の薔薇族がこっちに向かっていているのがわかったのかなって思ってます……」

「ああ、そのことでしたらほら、彼らが言っていたでしょう？  
誰かこっちへ向かって来る』って」

「でも、あれって逃げるための口実か何かじゃ……」

「あの双子、耳だけはいいんですよ」

「耳……?」

「はい。集中すれば2、3キロ離れた場所の音でも聞き分けられる  
そうです。きつと足音でも聞こえたんでしょう。負けず嫌いの彼ら  
のことですから逃げるための口実ではないと思いますよ」

「なんだそれ。2、3キロ離れた場所の音を聞き分けられるなんて…  
…びつくり人間じゃない。」

「……そうなんだ」

理解を超えたユノの答えに私はそれ以上何も言うことができなかつた。

耳に残る銃声。目に焼き付いた鮮血。不安、恐怖。私の中で膨らむ  
負の感情。だけど、これはまだ序章に過ぎない。残酷劇は始まった  
ばかり。

？・黒の包帯

「……大丈夫？」

「おう」

「……本当に？」

「ああ、本当に」

「……本当の本当に？」

「だーいじょうぶだって。姫は心配性だなあ」

「……だってえ……」

もう何度目かになるこの会話。私は馬鹿の一つ覚えみたいに『大丈夫？』と繰り返す。

アシルの右腕に刻まれた痛々しい傷。怪我をしたその腕で無理をして大剣を振るったせいか、真っ赤な血は今もまだ流れ続けている。決して軽いとは言えない傷なのにアシルは大丈夫だと言い張り、その傷を放置したままだった。

私のせいだ……。胸が締め付けられるような思いが私を支配していく。

私を庇ったから……。そんな思いが溢れ出し、言葉となって唇から零れ落ちる。『大丈夫？』この言葉を何度繰り返したって



意味をなさないことくらいわかっているけれど……。

せめて止血だけでもできればいいのだが、生憎包帯は勿論、今はハンカチすら持っていないかった。嗚呼、どうして制服のポケットにハンカチを入れっぱなしにして来ちゃったのかしらっ！

ないとわかっていながらも私はポケットの中を探った。その手に触れるのはユノとアシルに半ば強引に渡された拳銃と小型のナイフだけ。

こんなものじゃ使えな……ん？ ちよつと待って、使えるかもしれないわ。

「……ねえ」

ふたりは突然立ち止まった私を見て首を傾げる。

「姫、どうしました？」

私はユノの言葉には応えず、黙ったままポケットからナイフを取り出した。カバーを外し、そのナイフで

「姫ッ！？ ちよつと待て！ 何してんだッ!？」

ドレスの裾を切り裂いた。布の裂ける音が静かな森に大きく響き渡る。

「えっ？ 何って……ドレス切り裂いているの」

「うん、それは見ればわかるよ……って、そうじゃなくてッ！」

「あっ！ これ、お城のドレスだからこんなことしちやまずかったかしら……？」

「いや、それは姫のために作らせたものだから……って、だからそうじゃなくてッ！ そんなことしたら姫のドレスがボロボロになっちまうだろッ！」

「だって包帯もハンカチも持ってないんだもの……」

「俺は大丈夫だって言っただろ？ 姫がそんなことする必要ねえってッ！」

「アシルが怪我したのは私のせいだもの……。これ、私のものなんでしょ？ ちょっとくらい切ったって大したことないわ」

「ちょっとじゃねえだろ！」

「もう切っちゃったもの。今更何を言っただって遅いわよ？ ほら、しやがんで。せっかく切ったのに無駄になっちゃっ」

私はアシルをしやがませ、彼の腕について先程までドレスの一部だった黒い布を丁寧に巻いた。不格好な包帯だけど、何もしないよりはマシよね？

「そんな気にすることねえのに」

「アシルは平気でも私が気になるのよ……。はい、終わり」

私が布を巻き終わるとアシルはありがとう、と呟いた。照れたようにはにかむ彼はちょっとばかり可愛く見えた。

十

「これなら大丈夫そうですね」

「はあ……やっど、ね……」

あれから暫く歩き、私達は漸く石造りの簡素な家を見つけた。小さなその家にはベッド、テーブル、椅子など必要最低限の家具が備え付けられている。埃っぽいけれど、長年放置されていた割に傷みはそれほど酷くはなかった。

実はここに来る前に5軒程、木造の家屋を見つけていたのだけど、

どれも傷みが激しくてとても使える状態ではなかったの。そのせいで相当な距離を歩く羽目になった。もう足がパンパン。これ以上歩きたくない。

私は軽く息切れをしているというのにユノとアシルは涼しげな顔。何なのよ、この体力バカ達は！

「大丈夫ですか、姫？」

「……………ちよつと大丈夫じゃないかも……………」

私は近場にあつた椅子の埃を払い、それに腰掛けた。大分埃を被っていたから多少抵抗はあつたけど、疲れ切っている私にそんなことを気にしている余裕なんてない。

「あまり無理しないで下さいね。あの時も遠慮しなくて良かったんですよ？」

「いや……………あれは……………」

ユノの言う“あの時”とは5軒目の廃屋を見つけた直後のこと。既に疲労がピークに達しかけていた私にユノがある申し出をしてくれたんだけど……………。

+  
… + + + … +

「柱が腐りかけてますね……」

「……また、ダメなの……?」

「……そうですね、これではちょっと……」

「うそお……。もう5軒目よ……?」

歩き始めてからどれくらいの間時間が経ったのか、時計を持っていない私には正確な時間なんてわからない。だけど、その時間は決して短いものではないということだけは確かだった。休むことなく歩き続けてきたのだから歩いた距離だって勿論短くはない訳で……。

「もう……。いつになったら見つかるのよ……」

いつまでも進歩のないこの状況に私はガックリとうなだれた。ただでさえ疎らにしかないというのにそのどれもが使えないとなるとだんだん嫌気が差してくる。

「すみません。こんなに歩かせてしまって……。お疲れでしょう……?」

私はユノの言葉に小さく頷いた。まだ頑張れるから大丈夫だよ、とでも言えればよかったのかもしれないけど、そんな元気はこれっぽっちも残っていない。

「それなら僕にお任せ下さい」

「……え？」

ユノはそう言っただけで私のすぐ側まで来ると私の肩と腕ひかがみに腕を回した。次の瞬間、私の足は地を離れ、ふわりと身体が浮き上がる。顔を上げれば、すぐ近くにユノの顔が。

そう、お姫様抱っこだ。

「い、いいよっ！ こんなことしなくて！ 降ろして降ろしてっ！」

「でも、お疲れなんでしょ？」

「そ、そうだけど……でも、大丈夫だからっ！」

私は顔を真っ赤にしながら必死に訴えた。その姿は滑稽に見えたかもしれない。でも、この状況にどう対応していいのかわからなくて、私にはこれが精一杯だった。

私が通うのは名の知れたお嬢様学校。男子禁制のため先生も全員女性。そんな女学園に幼稚舎から通っている私は親と親戚以外の男の人と殆ど関わったことがなかった。

つまり、こういうことに免疫がない。

ユノにお姫様抱っこされるのは二回目のくせに何言ってるんだって思つかもしれないけど、あの時の私と今の私とでは置かれている状況が違う。

自分のいる場所がどこかわからない。

彼らを信用していいのかわからない。

無事に帰ることができのかわからない。

先の見えない未来に怯え、抱えきれない不安に押し潰されそうだったあの時の私には周りなんて見えていなかった。

今の状況も決して良いものとは言えないだろう。寧ろ悪い方向へ進んでいるかもしれない。でも、今は信用しても大丈夫だと思える人がいる。それだけでほんの少しだけど気持ちにゆとりが生まれた。

彼にお姫様抱っこされることに気恥ずかしさを感じるのはきっとこの小さなゆとりのせい。一回目の時に気恥ずかしいと感じなかったのは私にそんなことまで考えている余裕がなかったというだけの話だ。

歩かなくてもいいなんてかなり有り難い話。その上、その有り難い申し出をしてくれたのが羨ましいくらい綺麗な顔立ちの青年となれば、本当なら文句のつけようがない。

だけど……熱くなる頬、大きくなる心音。何だか無性に恥ずかしくて、そんな自分に堪えきれなかったの。

+  
∴ + + ∴  
+

だから私は疲れた身体に鞭打って無理矢理ここまで歩いてきた。私のことを気遣ってくれたユノの気持ちは嬉しいけど……あんなことされたら心臓の方が保たない。

一度座ってしまうともう立つ気にはなれず、私は椅子に腰掛けたままぼんやりとふたりの会話に耳を傾けた。

「なあユノ、これからどうすんだ？」

「しばらくは様子を見ましょう」

「こつちから仕掛けねえの？」

アシルはベッドに積もった埃を払いながら会話を続ける。片手で口元を覆っているため声が籠もり、聞き取りづらい。バシバシと叩くようにして払うものだから彼の周りには大量の埃が舞い上がっていた。

それ程広くない部屋だからか、窓を全開にしているにも拘わらず、それは忽ちに部屋中に広がっていく。余りの埃っぽさに私は思わず



顔をしかめ、両手で口元を覆った。

「この近くで他の薔薇族を確認した場合は仕掛けましょう。ですが、探してまで仕掛ける必要はないかと。探すとなるとどうしてもここを離れなくてはいけません。姫から離れるのは危険ですし、かといって連れて行っても危険な目に遭はわせてしまう可能性が高い。つて、アシル！もう少し加減して叩たたいて下さい！」

次々に舞い上がる埃にユノも口元に手を当て、綺麗な顔を僅かばかり歪める。口元を覆っているとはいえ、平気な顔をして埃を払い続けるアシルが私には不思議でたまらなかった。

「……ねえ、逆に仕掛けられた時って大丈夫なの？ 出口を塞がれて、火でも付けられたら……」

彼らの話を聞いていてふと思った。家の中って一見安全そうだけど、本当にそう？ 火を放たれればきつとひとたまりもない。窓の近くにいたら外から狙撃される可能性だってある。

「御心配なく。アシルと交代で見張りをしますし、それに完全に気を消せる人なんてそうはいませんから。仕掛けられる前に気付ければ、いくらでも手の打ちようはあります」

「ユノは僅かな心配でも察知できるんだ。俺もユノ程じゃないけど、人の気配を察知するのは得意な方だから安心していいよ。そんなことよりさ、少し寝たら？ 疲れてるだろ？」

アシルはそう言って、先程まで乱暴に叩いていたベッドを指差す。近づいて見てみるとそれは意外と綺麗だった。

「……ふたりは？ アシルとユノだって疲れてるでしょ……？」

「僕らは交代で眠りますから大丈夫ですよ。僕らのことは気にせず、ゆっくり休んで下さい」

「そうそう。ちゃんと見張ってるし、ちゃんと睡眠もとるから。安心して寝ていいよ」

「そう……？ ありがとう、ふたり共。じゃあ……少し眠らせてもらおうかな」

ふたりのお言葉に甘え、私は柔らかいベッドに身を委ねる。疲れのせいか、横になると私はすぐに夢の世界へと墜ちていった。

現実はまだで終わりの見えない悪夢。それならば……お願い、せめて夢の中では優しく穏やかな世界を。



？・偽りの笑顔

ねえ

私を呼んで？

違う

そうじゃない

貴方が呼んでいるのは

“私”じゃないわ  
：

+  
:  
+ + +  
:

窓の外を見ると、いつの間にか仄かな朱色を纏った闇は、全てを呑み込んでしまいそうなほど暗く深い漆黒へと姿を変えていた。この国で夜を迎えるのは、これでもう7度目になる。

あの双子と接触して以来、私達は他の薔薇族を見掛けてはいない。

このまま何も起こらなければいいのに……。

無理だとわかっていながらも私は幾度となく平穏を願った。

この7日間は偶々何も起こらなかったけど、いずれ他の薔薇族と衝突することになる。避けたくても避けることなんてできないってわかってる。わかってるけど……。ねえ、それでも尚、平穏を願う私は愚かなのかしら……？

私は机の上に肘を付き、小さく溜息をついた。

薄汚れた窓ガラスは翳った私の表情を映し出す。私は窓ガラス、正確に言えばそれが映し出すものを見て、もう一度溜息をついた。黒いドレスを纏った少女。ガラスに映るその姿は紛れもない自分のもので……。

嗚呼、制服を着ていた頃に戻れたら……。

「……皆、どうしているのかしら……？」

誰に問う訳でもないその言葉は空に吸い込まれ消えていく。答えなんて期待していない。抑この部屋には私ひとりしかいないもの。

アシルは食料調達に行っただけで、ユノは戦闘時以外まで武器なんか見たくないだろうと私に気を使い、隣の部屋で銃の手入れをしている。私の言葉を聞いていた人なんてひとりもないのだから答えなんて返って来るはずがない。

ひとりだからこそ零れたこの言葉。ひとりの時に思うのは元の世界のことばかり。

父さんはどうしている？ 母さんは？ ロゼは？

きっと皆心配している。華の国《この世界》と人間界《私の世界》の時間の進み方には違いがあるかもしれないけど、長い間留守にしていることに変わりはないのだから。

目が覚めた時、そこが見慣れた自分の部屋だったらどんなに嬉しいだろうか。

寝起きの悪い私を家政婦のモニカさんが起こしに来てくれるの。起きないと遅刻しますよお嬢様、って。ダイニングの扉を開ければ母さんが優しい笑顔で迎えてくれるの。おはようアンジェリカ、って。

これがただの悪い夢なら覚めてしまえばそこで全てが終わるけれど、これは現実という名の悪夢。覚めることなど永遠にない本当の悪夢。

またひとつ溜息が零れ落ちる。ひとりしているとだめね。浮かぶのは暗いことばかりだもの。でも、だからといってユノやアシルと一緒にいれば大丈夫って訳でもなくて……。

彼らとは大分親しくなったし、ふたり共私にとっても優しくしてくれる。私もふたりのこと嫌いじゃない。だけど、彼らの傍にいるのは“私”じゃないから……。

「ふたり……いるのは……じゃないもの……。……かもしれないな

いけど、私は……じゃないわ……。……じゃなくて、名前で……」

「何？ 名前で呼んで欲しいの？」

「きゃああー！」

誰もいないと思ってた。誰も聞いてないと思ってた。だから返事が返って来るなんて思わなくて……。まさか今の言葉を聞かれるなんて思わなくて……。

余りに驚いたものだから私は悲鳴に近い声を上げ、勢い良く後ろを振り返った。それだけならまだいい。最悪なことに振り返った反動で椅子が傾き、派手な音を立てて椅子ごと床に倒れ込んでしまった。

隣の部屋からドンツと何か床に落ちたような音が聞こえたのはその直後のこと。そして、乱暴に扉が開かれ、ユノが部屋に飛び込んできたのはその数秒後のことだった。

「姫ッ！ どうしましたか！？」

血相を変え、声を荒げる。今のユノからはいつもの冷静さなど微塵も感じられない。これほどにも慌てた彼を見るのは初めてだった。でも、それは束の間のこと。部屋の様子を見た次の瞬間にはユノの焦りに満ちた表情はきよとんとしたものに変わり、彼はドアの近くで立ち止まってしまった。

ユノがそんな顔するのも無理ないと思う。

部屋にいるのは床に転がる私と果物や木の実がたくさん詰まったバスケットを持ったアシル。他の薔薇族の姿もなければ、荒らされた形跡もない。勿論私もアシルも無傷。

私が椅子から落ちたことは私のすぐ側に倒れている椅子を見れば大

体想像はつくかもしれないけど、椅子から落ちたくらいであんな悲鳴は上げないでしょう？ つまり隣の部屋にいたユノには派手な物音の理由はわかったとしてもあの悲鳴の理由まではわからないのだ。相当驚いたと思うし、困惑していると思う。ユノに説明しなくちゃいけないと思い、私は口を開いた。……だけど、言葉が出てこない。私が呟いたあの言葉。アシルにどこまで聞かれたのか、そればかりが気になって思考がうまく働いてくれないのだ。

「何でもねえよ、ユノ。俺が後ろからいきなり話し掛けたから姫が驚いちゃってさ。それだけだよ」

妙な沈黙の中、口を開いたのはアシルだった。彼の言葉を聞き、ユノは安堵の笑みを浮かべた。

「なんだ、そうですか。姫に何かあったらどうしようかと思いましたがよ」

「見ての通り何もねえよ。姫もごめんな、驚かせちゃって」

「……えっ……ううん……」

私は差し出された彼の手を取り、立ち上がる。見るとドレスが所々埃で白く染まっていた。

「それでさ、姫は名前で呼んで欲しいの？」

「え……」

アシルの言葉に思わず埃を払う手が止まる。



「あれ、違った？ よく聞こえなかったけど、名前がどうのって言うってたよな？」

「あつうん、えっと…………… 『姫』って呼ばれるの落ち着かなくて…………… それで……………」

本当のことなんて言えるはずもなく、私は必死で言い訳を考えた。そして、出てきたのがこの言葉。自分でも今更何言っているんだろうって思ったけど、他に思い付かなかったのだからしょうがない。でも、アシルの様子からして最初から全部聞かれていた訳じゃないみたいで少し安心した。

「そうか？ いいじゃん、呼びやすくって」

「それはアシルが、でしょ。だったらアシルのこと騎士<sup>ナイト</sup>って呼んでやる」

私は頬を膨らませ、冗談っぽくそう言った。それはちよつと嫌かな、とアシルは小さく笑う。私も彼に合わせて小さく笑った。

この時、彼らは気付いていたのかしら……………？ 私が無理矢理明るく振る舞っていたことを……………。

「名前で呼んでくれたらそんな呼び方しないわ」

私はそう言っていたはずっぽく笑った。もしかしたらこの時の私は彼らではなく、自分自身を欺いていたのかもしれない。だけど、本当はどうなのか、それは自分でもよくわからなかった。

「ははっ、じゃあ今日から『アンジェリカ』って呼ばなきゃだな。」

でも、ちよつと長いよなあ」

「アシル、人の名前をそういう風に言うもんじゃありませんよ」

「いいよ、呼びやすさ重視なんてアシルらしいじゃない。それに自分でも少し長いと思うもの。じゃあアシル、『アンジェ』って呼んで。それとユノ、貴方も名前で呼んでくれる？」

「わかりました、アンジェリ」

「ストップ！ ユノ、敬称はつけちゃダメよ」

「えっ、なんでわかつたんですか？」

「……だつて初めて逢つた時、私のこと『アンジェリカ』『ローゼンノワール嬢』って呼んだじゃない。それにユノはアシルと違って礼儀とか気にしそつだもの。でも、それじゃあ何だかよそよそしい感じがするわ」

「ちよつと待て、姫……じゃなくてアンジェ！ その言い方はひどくないか」

「その通りじゃないですか、アシル。姫……いえ、アンジェリカがそう言うのなら」

私がそれを聞いてありがとつと微笑むと彼らも優しげな笑みを返してくれた。

「さて、アシルも帰つて来たことですし、夕食にしましょうか」

「うん」

ユノとアシルは夕食の準備をするためにキッチンへ向かう。私は偽りの笑みを浮かべ、彼らの後を追った。

やっぱり駄目ね。

心の奥底に潜んだ闇を簡単に消し去ることなんてできなかった。私の心に巣くう闇を、笑顔の裏に隠した気持ちに彼らは知らない。

？ 姫と私

あの日 ユノとアシルに出逢った日から私はずっと独りだった。  
いつも彼らが傍にいたけど、私は独りだったの……。

彼らが見ているのは

彼らが呼んでいるのは

彼らが護っているのは

彼らの傍にいるのは

“私”じゃないの

ユノとアシルは“私”を通して“姫”を見ている。ふたりだけじゃない。この国の人全てが“私”を通して“黒薔薇の姫君”を見ている。私はお姫様の代わりでしかないの。生まれ変わりだか何だか知らないけど、私は本当の姫じゃない。それ以前にこの国の住人ではないもの。

私は超能力者じゃないから彼らの本当の気持ちなんてわからないけ

ど、私にはこれがただの思い違いだとは考えられなかった。

だって、そうでしょう？

初めて逢った人間を自らの身を危険にさらしてまで助けるはずないもの。だけど、彼らは私を助けた。私の名前を知っていたくらいだから、もしかしたら、ふたりは以前から私のことを知っていたのかもしれないけど、逢ったのはあの時が初めて。それなのに彼らは私を助けたの。

理由は簡単。

私が黒薔薇の姫君だから。

私が姫じゃなかったら彼らは私を助けたかしら？

いや、それ以前にいきなり命を狙われるようなこともなかっただろう。

黒薔薇が助けたのは誰？

白薔薇が殺そうとしたのは誰？

それは“姫”であって“私”じゃない。

ユノとアシルに『姫』と呼ばれるたび、胸の奥がズキリと痛む。彼らに名前と呼ばせたのは自分の気持ちを誤魔化せるかもしれないと思っただけ。

だけど、本当にこんなこと言っつもりなんてなかった。だって心の

どこかではわかっていたんだもの、表面だけ繕ったって何も変わらないということ。

実際、何も変わらなかった。虚しいだけってわかっていたのに、どうして私はあの時、僅かな期待を抱いてしまったのだろう。馬鹿だよ、簡単に自分の心を騙せるはずなのに。

ねえ、貴方達はその笑顔は誰に向けられているの？

“私”の価値って何？

“私”の存在理由って何？

私はその答えを見つけない術を知らない。

だけど、たとえユノとアシルが“私”を見ていないとしても私は彼らを信用している。これは嘘じゃない。だって、私が黒薔薇の姫君である限り、彼らは私を絶対に裏切らないもの。

歪んだ考え方だった？

そんなこと自分が一番よくわかっている。本当は純粹に彼らを信じたい。だけど、私は強くないからこんな歪んだ考え方しかできないの。

信じて信じて、それでも裏切られたら？

そう、これは傷付かないための自己防衛。私は弱い人間だから。

以前、アシルが自分のことを使い捨ての駒だと言っていたけれど、所詮私も遊戯盤ボードの上で弄ばれる駒のひとつに過ぎないのかもしれない。騎士達がポーンなら私達、姫はキング。価値の低いポーンとゲームの勝敗を握るキング。だけど、どちらも同じボードの上を滑る駒のひとつに変わりはないのだから。

嗚呼、どうして私が姫の生まれ変わりなのかしら……。これは偶然なの？ それとも必然？

私である必要があるの？  
だって、もし他の女の子が黒薔薇の姫君なら貴方達はその子を護るのでしょうか？ もし、私が黒薔薇族以外のお姫様だったら貴方達は私を殺すのでしょうか？

それなら誰でも同じじゃない。私が黒薔薇族のお姫様である必要なんてどこにもないわ。偶然の運命になんて振り回されたくないの。

でも、もしそうでないなら……何故私が姫の生まれ変わりなの？

全てを知りたい。

何も知らないままでいたい。

矛盾していることはわかっている。でも、もう自分で自分がわからないの。

ユノとアシルは“私”のことをどう思っているの？ 彼らにとって私の存在って何？

その答えを知りたい。でも、全てを知ってしまうのが怖い。

そんな風に思うのは、きっと心のどこかで僅かに期待をしているからなのだろう。ふたりが“姫”じゃなくてちゃんと“私”を見てくれているんじゃないかって。

全てを否定する私と淡い期待を抱く私。交錯する想い。本当の想いはどこにある？

私は、何を信じたらいいのかな……。



この時の私は何も知らなかった。彼らの本当の気持ちも、彼らの私に対する想いも、そして私達に忍び寄る蒼い影があることも。

### 第三章 ？・蒼の爆弾魔

揺れる木の葉。頬を撫ぜる夜風。下を見れば、暗闇の中に仄かな明かりの漏れる小さな家が浮かび上がる。

固くゴツゴツした感触。遙か下の方に見える地面。私は今、高い高い木の上にいる。隣にはユノ。別の木の上にはアシル。木の葉に身を隠し、私達は息を潜める。

何故私達がこんな所にいるのだった？

それは数時間前まで遡る。全てはユノのあの一言から始まったのだ。

+  
…  
+

『青薔薇族に気付かれたかもしれません』

今朝、一番に聞かされたのがこの言葉だった。

私が寝ている間にユノが何者かの気配を感じ取ったらしい。彼によるとそれは青薔薇族のもので間違いないだろうとのことだった。

青薔薇族の姿を見た訳でもないのにユノがそう断言できる理由、それは彼らがその場からすぐに退いていったからだという。だから私のことも起こさなかったのだと。私には何故それだけのことでそう言い切れるのかいまいち理解できなかったけど、ユノとアシルが言うにはこれが彼らのお決まりの戦法らしい。

青薔薇族の代表騎士であるエルヴァとラウルは相手に気付かれず敵ターゲットを見つけ出すのが得意で、ターゲットがそこからすぐには移動しないと踏むとその場から一旦離れ、日が沈んでから暗闇に紛れて奇襲をかけるのだという。

だからユノも彼らの姿までは確認することができなかった。今まで多くの人々が彼らの手によって地獄を見てきたらしい。

だけど、これは黒薔薇族の代表騎士達にとっては殆ど意味のないこと。何故なら彼らは人の気配を察知することに長けているから。先に気付かれてしまったはこの戦法は全く意味をなさない。

休戦中にも拘わらず薔薇族の間では有能な騎士を狙った奇襲が後を絶たなかったという。理由は只ひとつ。そう、全てはローズゲームのため。ローズゲームが始まる前に代表騎士になり得る者を始末してしまおうという訳だ。そのため、エルヴァとラウルもこの方法で

ユノとアシルを仕留めようとしたらしいのだけど、その時は見事に失敗したんですって。

+  
…+  
+

だから今回も返り討ちにしてやろうって訳。青薔薇を刈り取るために私達はこんな所で彼らを待ち構えているのだ。

一度失敗しているのだから今回も同じ方法を取るとは限らないんじゃないかって？

私も初めはそう思った。

だけど、彼らの失敗は一度や二度じゃない。彼らはこの方法で幾度となく黒薔薇を討ち取ろうとし、そして幾度となく返り討ちにされてきたんですって。

それでも彼らがこの戦法で多くの人々を仕留めてきたのもまた事実な訳で。頭がいいのか悪いのか、よくわからないふたり組だと思っ。もしかしたらただ意固地なだけなのかもしれない。

「アンジェリカ、来たみたいですよ」

不意にユノが私の耳元で囁いた。見れば、淡い桃色の髪の毛の少女と群青色の髪を持つふたりの青年の姿が。いや、ひとりには『青年』というより『少年』といった方が正しいかもしれない。

「あれが、青薔薇……？」

「はい、凸凹コンビでしょう？」

「確かに……」

ひとりは背が高く、体つきもがっしりとして、どことなく威圧感があった。この位置からではよくわからないけれど、ユノやアシルよりずっと大きいのだろう。彼の手に握られた小型の銃は、恐らくユノや私が持っているものと殆ど大きさは変わらないのだろうけれど、彼が持つことでとてもとても小さく見える。

それに対し、もうひとりの騎士は随分と小柄だった。もしかしたら隣に立つ少女よりも小さいかもしれない。男とはいえ、その小さな身体のどこにそんな力があるのか、彼は自分より遥かに大きな斧を軽々と担いでいた。

身長差は年が離れているせいなのかもしれないけど（たえそうだとしても彼は大き過ぎる気がするけれど……）、武器はどう考えても逆じゃないかしら……？ 少女を挟むようにして立つふたりの騎士はどう見てもアンバランスだった。

「大きい方がラウル、小さい方がエルヴァです。因みにエルヴァはあれでもアシルと同じ年です」

「うそっ！？信じられない……」

驚いた。だつて背が低い上に童顔だからてつきりもつと幼いものだと思つていたんだもの。ユノの言葉があまりにも意外で、私は青薔薇族に向けていた視線を思わず隣にいるユノに向けた。

声を潜めながらとはいえ、彼といつものように会話をすることですし気持ちが悪くもなりましたのかもしれない。一瞬でも油断してしまつた私が悪いと思う。だけど、ほんの少し青薔薇族から視線を外した間にまさかあんなことが起こるなんて誰が想像できよう。

何の前触れもなかった。いきなりユノに抱きすくめられ、私は訳もわからず彼の腕の中へ。

刹那。

派手な爆発音。

激しい爆風。

それは一瞬の出来事だつた。

恐る恐る首を回すとそこには炎に飲み込まれた小さな家が。驚いた

なんてもんじゃやない。本当に心臓が止まるかと思った。だってこんな方法で奇襲をかけてくるなんて思わなかったんだもの……。

「……ばく、だん……」

「はい、これが彼らの戦法です。以前アシルが言っていたでしょう？ 爆弾を使う奴もいると。あれは青薔薇族のことです」

「な、なんで言ってくれなかったのよ……!!」

「爆弾なんて言ったらアンジェリカが取り乱してしまうかと思いついて」

「そ、そうかもしれないけど……だからってこれは心臓に悪すぎるわ……!!」

「……すみません。それにしても今回も派手にやってくれましたねえ。今夜は野宿になってしまいそうですが、我慢して下さいね」

ユノは私に後で迎えに来ます、と笑いかけると銃を握り、木の上から飛び出していった。

パアアン

拳銃が唸り、銃弾が放たれる。狙うは青薔薇の姫君。ラウルが身を挺して少女を庇うも僅かに避けきれず、少女の頬を銃弾が掠める。

パアアン

放たれた二撃目。ラウルの腕から迸る赤い赤い鮮血。

続けて別の木の上で待ち構えていたアシルが大剣を振り上げ、切りかかる。落下のスピードを利用し、いつもより威力の増した刃で青薔薇の姫君を狙う。

キンッ

間一髪。ギリギリのところでもエルヴァが斧で大剣を受け止めた。しかし、勢いのついた剣は重く、彼は少女共々地面へ倒れ込む。

「なっ！お前ら、なんで……！」

「残念だったなあ。家の中には誰もいねえよ」

「くそっ……！」

耳をつんざく銃声。



甲高い金属音。

恐怖に染まる少女の悲鳴。

迸る鮮血。

燃え盛る炎。

赤と黒が支配する舞台<sup>ステージ</sup>で彼らは残酷な不協和音<sup>ハーモニー</sup>を奏でる。恐怖劇の唯一の観客は私。特等席で物語の行く末を見守る。

息を殺して。

じつと動かないで。

音を立てては駄目。見つかったら私も役者の仲間入り。恐怖劇の主役なんて絶対に嫌。

黒薔薇優勢。

青薔薇は姫を護ることで精一杯。鮮やかな赤が舞い、青薔薇は少しずつ赤に侵蝕されてゆく。黒薔薇の勝利は時間の問題だと思った。

それなのに。

「きゃあ!」

突然吹いた強い風。嗚呼、なんて運が悪い。風に煽られ、バランスを崩した私は枝から滑り落ちてしまった。

落ちるっ……!

枝を掴もうと私は必死に腕を伸ばす。幸いにもその手は枝に届き、地面に叩きつけられずに済んだ。だけど、安心はできない。だって……。

役者がひとり増えた。さあ、主役交代の時間が訪れる。

「見いつけた」

青薔薇は私を見据え、不敵な笑みを浮かべた。  
。

？・ラファールの悪戯

ゲームは最後まで何が起こるかわからない。

だからゲームは面白いのです。

先が見えてしまうゲームなんてつまらないでしょう？

退屈がお嫌いな勝利の女神。

気紛れな彼女はどちらに微笑むでしょうか？

+  
:  
:  
:  
+

形勢逆転。状況は180度変わってしまった。

「そんな所にいたんだね、オヒメさま」

エルヴァは口角を吊り上げ、悪魔の笑みを浮かべた。一瞬にして凍り付く背筋。恐怖という感情が全身を駆け巡る。

この手を離せば固い地面へ一直線。だけど、離さなければ。

表情を一切変えず、ラウルは無言で私に銃口を向ける。脳裏に浮かぶのは赤を纏う自分の姿。このままでいたらどうなるか、そんなことはわかってる。だけど、枝を掴んでいるだけで精一杯の私に一体何ができるっていうの……？

引き金に指がかけられる。脳裏に『死』という一文字がよぎったその時だった。ユノがとっさにラウルの右腕を蹴り上げた。鈍い音、続けて銃声が響く。放たれた銃弾は私の左腕を掠め、真っ赤な血を滲ませた。

襲ってくる痛み。思わず離してしまった左手。更にそこへ再び突風が襲う。私を嘲笑うかのように不規則に吹き荒れる風。もう一度枝を掴もうと腕を伸ばしたけれど、疲れきった華奢な腕では耐えきれずもなく……。

「あつ  
」

ついに右手までも離してしまった。必死に伸ばした手は虚しくも宙

をかき、私は地面へ向かって一直線に墜ちてゆく。

耳元で響く風の音。ゴォツと唸る低い音に聞き慣れたふたつの声が重なる。私の名を叫ぶ黒衣の騎士。ぶれる視界の端に映ったのは大剣を投げ捨て、必死に駆け寄るアシルの姿。

眼前に迫る地面。アシルは私を受け止めようと飛び込むようにして腕を伸ばす。迫り来る恐怖。私は固く目を瞑り、唇を噛み締めた。

鈍い音が響く。背中に衝撃を感じたけれど、痛みはそれ程酷くはなかった。目を閉じていてもわかる。私の頭をしっかりと抱える大きな手。アシルが私を衝撃から護ってくれたのだ。

「……………アンジエ、大丈夫か!？」

私はそつと瞼を開けた。大丈夫、そう言おうと口を開いたのだけど、私の口から飛び出した言葉は全く別のものだったの。

「アシルツ！後ろおー！！！」

目の前にはアシルの顔。そして、その後ろには大きな斧を振り翳すエルヴァの姿が。エルヴァは私達を見下ろし、不敵な笑みを浮かべる。彼は私達に狙いを定め、巨大な斧を振り下ろした。

パンツ

響く銃声。ユノが放った銃弾がエルヴァの腕を捉える。彼の手に握られた斧はぐらりと揺れ、私達のすぐ横を通り、地面に深く突き刺さった。

パンツ

再び響く銃声。ユノがラウルから視線を外した時にできた一瞬の間隙。ラウルはそれを見逃さなかった。あの距離では流石のユノも避けきれず、彼の肩口から真っ赤な鮮血が迸る。

「アシルツ！」

ユノは声を張り上げ、もうひとりの黒薔薇の名を呼んだ。アシルが投げ捨てた大剣を拾い上げ、こちらに向かって走り寄る。アシルは小さく頷くと私を抱き上げ、ユノの後を追った。

「待てツ！黒薔薇ア！！！」

エルヴァの声と数回の銃声が聞こえたけれど、青薔薇も決して軽いとは言えない傷を負っていたせいか、彼らが私達を追ってくることはなかった。

十

青薔薇族の姿と紅く燃え盛る焔はもう完全に見えなくなっていた。ユノとアシルは既に走ることを止めていたけれど、私は未だアシルに抱えられたまま。彼らが地面を蹴る音を聞きながら私は頬を撫ぜる冷たい風を感じていた。

あの時、私が……。

私を苛む想い。責任感が私の胸を締め付ける。

急に込み上げてきた涙。私は俯き、唇を噛み締めた。ふたりに悟られたくなくて、溢れ出しそうになる涙を必死に堪える。だけど、彼らも鈍感じゃないから……。



「アンジェ……？」

先に私の異変に気が付いたのはアシルだった。少し先を歩いていたユノも振り返り、足を止める。

「……大丈夫か？」

アシルは私をそっと地面へ降ろし、私の肩に優しく触れた。私を見るふたりの表情はとも心配そうかおで。

「……ごめんなさい」

私は俯いたまま呟くようにそう言った。その声は今にも消え入りそううで、吹き荒れる風の音に掻き消されてしまいそうな程が細い。

「私のせいだわ……」

震える声で言葉を紡ぐ。口を開くたび、じわりと涙が滲んだ。

「アンジェリカのせいじゃありません。今回は運が悪かっただけですよ」

気にしないで下さい、とユノは微笑んだけど、その笑顔はどことなく辛そううで。そうよね、あんな傷を負って辛くないはずないもの……。

「違う、私のせいだわ……。ユノが怪我したのだから……！」

ついに瞳から一滴の涙が零れ落ちた。それは私の頬を伝い、一筋の跡を残す。

「こんなのただのかすり傷です」

ユノの嘘つき。どう見たってかすり傷じゃないのに。それなのに彼はいつも通りに笑おうとするの。

「……嘘っ！どう見たってかすり傷なんかじゃ……！」

再び口を開くと唇にユノの長い指が触れた。私が口を嚙むとユノはもう一度、かすり傷だと言って微笑む。そんな彼に私はそれ以上何も言うことができなかった。

義務的な愛ならいらぬ。私はそんなもの愛とは呼ばぬ。  
優しくしないで。どうしていいかわからなくなるから。

？・黒衣のシュヴァリエ

“護らなくちゃ”じゃなくて“護りたい”。“義務的に”じゃなくて“純粹に”。自分のそんな気持ちに気付いたのはあの日から。じやあ、そう思うようになったのはいつからだった？

今までにも護衛の仕事は何度かやったことがある。だけど、こんな風に思えたことなんて一度もなかった。  
俺達のことなんか少しも気遣わない護衛対象ども。俺達が傷を負おうと奴等はお構いなし。有力者にとって俺達、騎士団員は使い捨てる駒に過ぎない。奴等にとっても俺達にとってもそれが当たり前だった。

だけど、あの子は違う。一緒に過ごした時間はまだ短いかもしれないけど、少なくとも俺はそう感じたんだ。

なあ、俺達じゃああなたの傍にいてあげられないのかな……？

+  
…+  
+

薄暗い森の中、地面に座り込み、固い幹に背中を預ける。隣には黒衣の少女。朝からずっと強張っていた表情も今は安らかな寝顔へと変わっている。俺の肩に頭を預け、小さく寝息をたてるその姿に柄にもなく可愛いだなんて思ってしまった。

吹き荒れていた風も穏やかになり、俺達を優しく撫ぜる。辺りは静まり、先程のことがまるで嘘のようだった。

「……………はあ」

無意識の内に零れる溜め息。こつこつと静かだとしてもあの日のことが頭をよぎる。

俺らしくもない。自分でもそう思う。落ち着かないこの気持ち。それを無理矢理振り払うかのように俺はがしがしと乱暴に頭を掻いた。

「……………アシル、何かあったんですか？」

突然聞こえたユノの声に思わず肩が跳ねる。見ればユノは眉を顰め、怪訝そうに俺のことを見ていた。

「何だよユノ、まだ起きてたのか。俺が見張ってるからお前は休んでろって言ったろ？」

「そんな何度も溜め息をつかれちゃ寝るに寝れませんよ……………」

うつ、と言葉に詰まる。誤魔化そうと思って無理矢理話を逸らしてみたけれど……駄目だ、これ以上言葉が出て来ない。

「……………わりい」

たつぷり間をあけて漸く出たのがこれだった。バカだな俺は。こんな態度をとったらユノに心配かけるだけだっていうのに。

「……………何があつたか知りませんが、相談くらいは乗りますよ？……まあ、無理に話せとは言いませんが」

「……………あいな、俺……………」

そこまで言つて俺は口を閉ざした。実はユノに話すべきかどうかずっと迷っていたんだ。強引に聞き出してくれば楽なのにユノはいつもそうやって強く聞いてはくれない。

口を開けては閉じ、また開けては閉じる。馬鹿の一つ覚えみたいにそれを繰り返す俺は端から見たら滑稽かもしれない。嫌な沈黙の中、ユノの怪訝な視線が痛い程に突き刺さる。

話せば解決するかと聞かれれば答えはきつとイエスではないだろう。だけど……………。

「……………俺、聞きちゃったんだよ」

長い沈黙を静かに破り、躊躇いながらも俺はそう切り出した。

「何を、ですか……………？」

眉を顰め、ユノは俺に問う。迷いは未だに消えてはいないが、ここ

まで言ったのだからもう話すしかないだろうと自分に言い聞かせ、俺はあの日のことを話し始めた。

あの日、外から戻って来た俺が部屋の扉を開けると、そこには華奢な腕に顔を埋めるアンジエの姿があった。一向に顔を上げようとしない彼女の様子にいつもとは違う雰囲気を感じながらも話し掛けようと近づいたその時だ。僅かにアンジエの声が聞こえた。悲痛な声色に思わず彼女の肩に伸ばしかけた手が止まる。小さく震えるその声が紡ぎ出す言葉に俺は動揺した。アンジエが呟いたあの言葉。俺は今でも鮮明に覚えている。

ふたりの傍にいるのは私じゃない。

私は黒薔薇の姫君の生まれ変わりかもしれないけど、本当の姫じゃない。

確かにアンジエはこう言った。そして彼女はこう続けたんだ。

『姫』じゃなくて名前で呼んでもらえたらこの気持ちを誤魔化せるかしら……。

俺の存在に気付くことなく悲痛な言葉を並べていくアンジエ。聞くに耐えられなくなった俺はアンジエが呟いた言葉の一部だけが聞こえたふりをしていつものように彼女に話し掛けたんだ。その言葉を止めるために……。

アンジエは俺の声に酷く驚き、派手な音を立てて椅子ごと床に倒れ込んだ。予想以上の反応に判断を誤ったかと不安に駆られたが、名前で呼ぶことでアンジエの気持ちが落ち着くなら、アンジエがそれを望むなら、そんな思いから俺はもう一度彼女に問うた。名前で呼んでほしいの、と。

だけど、結局は何も変わらなかったのかもしれない。

時折、アンジエは一瞬だけ悲しげな表情を見せることがあった。あれはきつと無意識なもの。恐らく彼女自身は気付いていない。あんな顔をさせたくなくて、アンジエに本当の笑顔を見せて欲しくて……。だけど、その悲しげな表情は今もまだ消えてはいないんだ。

今まで過ごしてきた境遇が違い過ぎるアンジエと俺達。たぶん俺には今の彼女の心境を理解してあげることができない。だけど、アンジエにとって今の状況が酷なものだということは確かだ。もしかしたら彼女の苦しみは俺の想像を遥かに越えているのかもしれない。アンジエにとってこの状況が酷であること、アンジエがずっと孤独を感じていたこと、それらに気付いたのはあの日アンジエの言葉を聞いてから。それまで何も気付いてやれなかった自分が腹立たしい。そして、気付いたところで何もできない自分がもどかしい。こんな想いを抱くなんて本当に俺らしくないと思う。



嗚呼、俺はいつから“アンジエ”を護っていたんだろう。

初めは“姫”を守っていた。いつもより少しばかり大きなこの仕事を成功させれば多くのものを得ることが出来るだろう。だけど、俺は地位も名誉も莫大な報酬にも興味はない。彼女を護る理由はただひとつ。これが仕事だから。ただそれだけ。そのはずだった。

だけど、気付けばどうだ。今俺が護っているのは黒薔薇の姫君ではなく、アンジエリカ“ローゼンノワール”というひとりの少女。今まで誰かを護りたいなんて感情を抱いたことのない俺はこの感情をただ持て余すばかりで……。

俺は、どうしたらいいのかな……。

騎士の想いになど気付かず、姫君は自ら孤独という名の奈落へと落ちてゆく。  
すれ違う想い。交わる時は訪れるのだろうか。

#### 第四章　？・紅薔薇の歌姫

響く歌声。大樹の陰に身を隠し、私はただ一点を見据える。私の視線の先には真紅のドレスを纏った少女がひとり。地に腰を下ろし、小さな唇で美しいメロディーを奏でる。艶やかな黒髪がふわりと風に舞い、肩の上で揺れた。

辺りに彼女以外の人影は見当たらず、その余りにも無防備な姿に疑念が募る。だっておかしいじゃない。こんな目立つ場所であつたひとり、あれではまるで殺してくれとでも言っているかのよう。彼女が私と同じ立場の人間ならば。　　。どう考えてもこの状況は異様だ。

戻ろう。

辺りがうつすらと明るくなった頃、目を覚ました私。固い地面に座り込み、固い幹に背中を預けるといふ最悪としか言えない条件下で眠ったせいかな身体の至る所に鈍い痛みが走る。

最悪。警沢言つてられないのはわかってはいるけれど、そんな言葉が思わず口から零れた。ゆっくり立ち上がり、身体を大きく伸ばす。

ふと隣を見れば、自分から見張つていると言い出したはずのアシルまでもが小さく寝息を立てていた。ダメじゃない、なんて心の中で呟く。だけど、本気で責める気なんて毛頭ない。だって、彼も疲れていることくらい百も承知だもの。

ふたりがこんな状態では動くに動けない。だからと言って疲れているであろう彼らを起こすなんて私にはできない。何もすることがな

く手持ち無沙汰になってしまった私は元いた場所にもう一度座ろうと膝を屈めた、その時だ。何かか聞こえた。それは耳をつんざくような銃声や甲高い金属音ではなく。

微かに聞こえた歌声。聞いたことのない、されど耳に心地良く響く旋律。不意に好奇心が芽生えた。嗚呼、この時の私は何を思ったのだろう。気付けば私はその声を追っていた。

そして、私達がいた場所からさほど離れていないこの場所で私はこの異様な光景を目にすることとなった。

今すぐに引き返すのが賢明だろう。あの子が本当にひとりだとは限らない。彼女の騎士達ナイトが獲物を狙い、近くで息を潜めている可能性だってあり得る。そう、これは畏かもしれないのだ。

それにふたりが目覚ます前に戻らなくては彼らに心配をかけてしまう。いや、私が傍にいないと知ったらそれだけでは済まないかもしれない。

不安、焦燥。急にそんな感情が込み上げ、私は踵を返した。来た道に戻ろうと足を踏み出したその時。

「わっ  
「!」

焦りから気持ちばかりが先走る。足下の注意が疎かになり、大樹の根に躓いてしまった。思わず上げた声に全身が一気に強張る。

「……誰？」

歌が止み、少女が振り返る。私よりも深い青の瞳と視線がぶつかった。沈黙の中、震える足で一步また一步後退る。木の葉や小枝を踏

む音がやけに大きく響いた気がした。  
今すぐ走って逃げてしまいたい。だけど視線を外すのが、背を向けるのが、怖い。

「……………ねえ、貴女もひとり？」

不意に発せられた彼女の声にびくりと肩が跳ね、足が固まる。パニック状態の頭。彼女の言葉が意味のない音のように通り過ぎていく。何を言われたのかすぐには理解できなかった。

答えを待つかのように少女は私の瞳をじっと見つめる。何も言うことができない唇、困惑に染まる瞳。

いつまでも口を開かないでいると突然少女が立ち上がった。真紅のドレスを揺らしこちらに歩み寄る。渴いた喉から引きつった声が漏れた。

遠くで見えていた少女はもう目の前に。彼女の白く華奢な腕が私に向かって伸ばされる。思わず目を閉じた次の瞬間、優しく手を握られた。

「私、アイリス。ノワゼット。貴女は？」

瞳を開ければ、そこには柔らかな笑みを浮かべる少女の姿が。

「……………ア、アンジェリカ。ローゼンノワール……………」

掠れた声でただそれだけ呟くと彼女は笑みを深め、優しく囁いた。  
私は貴女の敵じゃない、と。

十

「……ねえ、ひとつ聞いていい？」

真紅の少女　アイリスの隣に腰掛け、彼女に問う。なあに？、とアイリスは小首を傾げた。

「どうしてひとりで歌なんか……」

アイリスが紅薔薇の姫君であること。戦闘でふたりの騎士を失ったこと。騎士達が庇ってくれたおかげで彼女だけは生き延びれたこと。  
。あの後、アイリスが全て話してくれた。畏なんかじゃない、彼女は本当にに独りだった。それなのに何故？　見つけたのが私でなかったらアイリスは今この世に存在していなかったかもしれない。

「私、歌うの好きなんだ。どうせ死んじゃうなら好きなこととしてから死にたいじゃない」

笑顔で答えるアイリス。彼女の答えを聞いた私はどんな表情かおをしていただろうか。

「な、なんてこと言うのよッ！ どうせ死ぬだなんて……！」

「ねえアンジェリカ、このゲームのルール覚えてる？ 私が生き残るためにはこうしなきゃいけないんだよ？」

突然、アイリスの顔から表情が消えた。片手に握られた拳銃。銃口が私の額にあてられる。引き金に指がかけられ、私は思わず目を瞑った。

「バアンツ！……なんてね。ごめん、びっくりした？」

アイリスはいたずらっぽく笑い、懐に拳銃をしまった。治まらない鼓動。一瞬、本気で殺されるかと思った。

「武器はある。だけど、使いこなせなきゃ意味はない。騎士を失ったお姫様が生き残れる可能性はゼロだと言っても過言じゃないよ」

アイリスはまるで他人事のように言い放つ。彼女の言っていることは確かに間違っではない。もしアイリスと同じ立場に立った時、生き残る自信があるかと問われれば私はノーと答えるだろう。だけど、例え厳しい状況だとしても自分の死を前にして何故アイリスはこんなにも落ち着いていられるの……？

「死ぬのが、怖くないの……？」

「怖くない、というか……私には失うものがないから」

率直な疑問。返ってきた答えはとても悲しく。悲しみを帯びた瞳。アイリスの儂い笑みが胸に深く深く突き刺さった。

アンジェリカ、貴女には教えてあげるよ。きつとこんな話ができるのは貴女が最後だから。  
私の話、聞いてくれるよね？



？ 赤の記憶

私がまだ高校生だった頃、何でもない日常が何よりの幸せだと気付いたのは全てを失った後でした。

+  
∴ + + ∴  
+

「行つてきまーす！」

スクールバッグを片手に家を飛び出した私。外に出ると晴れ渡る空がどこまでも続いていた。雲ひとつない快晴。気持ちの良い風が頬を撫ぜた。

「アイリス！ 忘れ物よ！」

聞き慣れた声が響く。振り返ると桃色の包みを差し出す母の姿が。

「あっ、お弁当！ ありがと、じゃあ行つてきまーす」

「気を付けてね」

「おねえちゃん、いつてらっしゃーい」

微笑む母さん。その隣で年の離れた弟が小さな手を振る。私が手を振り返すと弟はもう一度私を呼び、その手を高く挙げ小指を立てた。

「かえったら、やくそく、だからねー！」

「うん、約束ね」

私も同じように真っ青な空に小指を掲げる。もう何度目になるだろうか。朝、玄関の前で交わす私達の指切りのサイン。可愛らしい笑みを浮かべた弟に私はもう一度手を振り、学校へと歩を進めた。

いつも通りの朝。特別なことなんて何も無い。こんな日常が明日も明後日も、この先ずっと続くものだと思っていて疑わなかった。それなのに　ねえ、誰がこんなこと想像できた？　まさかこれが家族と交わす最後の言葉になるなんて　。

十

「終わったー！　あー、疲れたー」

授業チャイムと同時に隣に座る少女が目を覚ます。彼女は最早枕と化していた教科書やノートをいそいそと片付け始めた。

「ベティったら殆ど寝てたくせに疲れたはないでしょー」

呆れ顔でそう返せば私の友人　ベティは自慢気にノートを差し出す。そこには綺麗に写された文字が並んでいた。いつもそう。授業は大して聞いてなくせにノートだけはバッチリで。その上、要領がいい彼女は成績も悪くない。……何だか悔しい。

「あつ、そうだ！　ねえアイリス、今日これから空いてる？」

不意に何か思い付いたようにベティは私に問い掛ける。大した用事はない、と答えると彼女はその大きな瞳を輝かせた。

「この間ね、すっごく可愛いカフェを見つけたの！　そのケーキが絶品なんだって！　ねえ、これから行こうよー」

嬉々として話すベティ。期待の眼差しが私に向けられる。

「しょうがないなあ。ベティがどうしても言うなら行ってあげてもいいよ？」

「本当は行きたいくせに素直じゃないなー」

ベティの言う通り。甘いものに目がない私がそんな話を聞いて断れるはずがない。

帰ったら遊んであげる、駄々をこねる弟と交わした約束。だけど、偶には寄り道してもいいよね？　明日は早く帰るから、なんて

心の中で謝りながら私はベティと共に学校を後にした。

「わあっ、すっごく可愛いじゃん！」

「でしょー！」

学校から歩くこと約十分。辿り着いた先にあつたそれはまるで。

「お菓子の家みたい！」

屋根はビスケット、扉はチョコレート。勿論作り物だけど、それは小さい頃に絵本で見たお菓子の家そのものだった。子供みたいにはしゃぐ私達。やっぱり女の子だもん、こんな可愛いカフェを目の前にしたらやっぱりテンションだつて上がる。早く入るうよ、とベティに促され私達は店の扉を潜った。

賑わう店内。女の子達の楽しげな声が飛び交う。私達も席に着き、美味しそうなケーキやタルトの並ぶメニューに目を通した。どれにしよう？ 優柔不断な私達は暫くの間メニューとにらめっこを繰り返す。散々悩んだ挙げ句ベティはイチゴタルトとミルクティー、私はミルフィーユとレモンティーを注文した。

「これおいしいー！」

「ねえ、一口交換しようよ」

運ばれてきたケーキ。一口食べれば口の中いっぱい甘い幸せが広がる。その美味しさに思わず頬が緩んだ。甘いスイーツに美味しい紅茶、自然と会話も弾み、気付けば私達はお喋りに夢中になっていた。話題は尽きることを知らず、楽しい時間はあつと言つ間に過ぎ去っていく。気付けば窓の外は宵闇に染まっていた。

「そろそろ帰ろっか」

ガラス越しに日の落ちた街を見て私達は席を立った。会計を済ませ、店の外に出ると厚い雲に覆われた空が私達を出迎える。雨が降りそうだなんて思った矢先、ポツリポツリと空から雨粒が落ち始め、地面に小さな染みを作った。

「うわあ、雨降って来ちゃった……」

次第に強さを増していく雨を見て傘がないと騒ぐベティ。その隣で私は平然と折り畳み傘を取り出す。それを見た彼女は私の腕を掴み、入れてくれとせがんだ。

「えー、ベティの家私と反対方向でしょ」

「この雨の中友達を置いていくのっ!？」

「走れば大丈夫じゃない？」

軽くあしらえば薄情者、鬼畜だなんてベティは散々なことを言ってくれる。そんな彼女に私が傘を差し出すとベティはきよとんとした顔でこちらを見返した。

「うそ。ほら、送ってあげるから感謝してよね？」

「さすがアイリス！　ありがとう助かる！　やー、アイリスは本当優しいなあ」

「さつきまで真逆のこと言ってたくせに調子いいんだから……」

小さな傘の下、ふたり身を寄せ合い街灯に照らされた夜道を歩く。強さを増す雨がしきりに傘を叩いた。ベティの家に着いたのは歩き出してから数分、靴に雨水が染み込み始めた頃だった。門の前でベティと別れの言葉を交わし、玄関へと続く石畳を駆けていく彼女を見送る。

そして私は先程歩いて来た道を引き返し始めた。住宅街から少し外れた、喧噪を知らぬその場所に私の家はある。足早に追い抜いていく人々を見送りながら私は家へと続く道を黙々と歩いた。

曲がり角に差し掛かる直前、私はふと気付いた。

何に？

雨音に混ざる人々のざわめき。それは曲がり角の向こう、私の家の方向から聞こえてくる。何かやっているのかな。考えてみればいつもより人通りも多かった気がする。この時はまだ他人事。それ程気

にも留めず、私はその曲がり角を右折した。

異変に気付いたのはその直後。少し遠くに見える我が家、その周りに群がる人、人、人。ただ事ではないことくらい誰にだってわかる。サアーッと血の気が引き、気が付けば私は傘を投げ捨て駆け出していた。群がる人々を掻き分け、そこで目にしたものは。

何が起きているのか理解できなかった。いや違う、目の前の事実を受け入れることができなかったんだ。そこから先の記憶は霧がかかったように曖昧でよく覚えていない。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1711e/>

---

薔薇姫 story of the black rose

2010年12月17日02時39分発行